エッシャーの絵の中で

町役太郎

一

一

　太陽はいつも自分の頭上にあるとは限らない。目に見えるものがすべて真実とは限らないし、そこに起きた出来事がすべて現実とはいいきれない。そんな夢とも現実ともいえない出来事が、まさか自分の目の前で起こるとは思ってもみなかった。運命というものがどうゆうものか、それまで考えたことすらなかった。そこに行ってしまったのが、すべての始まりだった。

　その建物はＪＲ中野駅前の、ブロードウェイを抜けたところに位置していた。ベージュの建物は五階建ての雑居ビルで、かなりの年数が経っているのか建物のいたるところにしみが浮き出ていた。他のビルに比べると、随分窓が少ないように感じたのは気のせいかもしれない。その建物の一階には喫茶店と占いに関する書籍や小道具、魔女グッツまでミステリー関連商品が沢山並べてあるショップがあり、店の奥には二階の占いコーナーまで通じる階段があって、そこには五人の占い師が各部屋に陣取り、お客を待っていた。照明を少し落とした階段を上がっていくと、まず右手にタロット占いダビデの星と、入り口のドアにレリーフのある部屋がある。その左隣には星座血液型占い。向かいの部屋は左側から風水占い。その横に四柱推命とあり、突き当たりの一番奥には、水晶占いパンドラの箱とドアにレリーフのある部屋があった。階段を上ったところには大きな木の長椅子が置いてあり、その椅子には五人の若い女性が座り、占いの順番を待っていた。その彼女たちを見ている限り、人生に疲れて悩んでいるという感じではなく、ゲーム感覚で自分を占ってもらうという明るい表情が見受けられた。

　可世木信司は占いにはまったく興味がなかったし、そのような非科学的なものは、一切信じないようにしていた。しかし今日はどうしても彼女が、この占いの館に来たいというので渋々ついてきた。この占いの館は女性雑誌に紹介されると、みるみる人気が出て休日ともなると、二時間や三時間待つのが当り前の状況だった。中でも館の一番奥に位置したパンドラの箱がよく当たると評判で、どうしても人気がここに集中してしまうので、御客が多いとき店側は整理券を配っていた。信司たちが行ったその日はもう夏休みも終わったこともあり、雨も多少ぱらついていたため、店内は比較的空いていた。

　信司と彼女の夏目明日香は同じ東都大学の三回生で、共に同大学の映画研究会に所属していた。大学敷地内の北西に取って付けたような、プレハブ二階建てのサークル棟があり、ここには三十あまりの文科系サークルが犇めいていた。窓がない西側と東側の壁には、アート研究会なるサークルが描いた巨大な恐竜の壁画が描かれているため、この建物をより一層不気味なものにしていた。映画研究会なんていっても名ばかりで、講義の空いている時間に来て、レンタルビデオ屋で借りてきた映画を鑑賞したり、映画について批評したりするだけなのだが、それでも映画好きにとっては、映画の話を仲間とするのが何よりの楽しみだった。

　二人の関係が始まったのは一年前、明日香が応募したロードショーのチケットがペアで当たったため、信司は同学年ということもあり、たまたま部室にいた信司を明日香は映画に誘った。映画の内容はアメリカの悲哀映画だったが、映画が終わった後明日香が信司に「出よう」といって横を向くと、信司のうっすらと濡れた瞳にテロップが反射して映り、思わずそれに見蕩れていた。明日香はからかい半分で信司に「泣いているの？」というと、信司は怒ったように「泣いて

ない」と明日香の反対側を向き泣き顔を隠した。館内はキャストのテロップが流れていてまだ辺りは暗かったが、信司の目は明らかに濡れていた。明日香は信司の腕にしがみつき、思わず「好き」と口走ってしまった。信司は振り向き様に明日香の唇に自分の唇を重ねた。そのときのキスの味はちょっぴりしょっぱかったと、後に明日香は信司に打ち明けた。

　信司たちはあまり待たずに、パンドラの箱に入ることができた。コールタールを塗り付けたような黒塗りの厚いドアを開けると、薄暗い明かりの中にイスラム圏の女性がつけるベールを被った女性が、小さなテーブルを挟んで椅子に座っていた。全身黒ずくめでいかにも魔女を意識したコスチュームだった。身体つきを見る限り女性に間違いなく、ベールに隠れ目元しか分からないものの、筋の通った鼻とやや切れ長ではあるが、はっきりした二重は日本人離れしたエキゾチックな顔に見えた。頭の先からつま先まで、すべて黒ずくめのこの女性は、どこの占い部屋の占い師よりも、でよく当たると評判だった。

　最初この部屋に入ったとき、身体が凍りつくような寒さを覚えた。まだ残暑は厳しい。それなのにここは冷蔵庫のように底冷えする。エアコンが利き過ぎているのだろうが、それだけではないような気がした。

　信司は自分自身占いを信じないのはもちろんだが、占いごときに頼る人がどうにも情けなく思えた。自分が進む道ぐらい自分で決められずに、占いに身を委ねる人たちが哀れにさえ思えた。子供の頃から懐疑的なものの考えをする子供だった。一九九九年七月にノストラダムスが、人類は滅亡すると予言したにも拘らず、今でも人類は現存している。ただ信司に限らず人というものは、自分にさえ関わらなければ、実際に起こるか起きないかは別にして、どこかで何か不幸な出来事を望んでいるものである。

　端から予言なんて信用していなかった信司には、なぜ世の中の人が、こうもくだらない噂に振りまわされるのか理解できなかった。それなのに明日香に説得され、渋々ここについてきた。

　女性占い師の前には透かし彫りを施した紫檀の丸い小さなテーブルがあり、その上に子供が遊ぶ手毬ほどの水晶玉が置かれていた。着物の擦れる音しか聞こえない静かな部屋には、どこか懐かしい香の香りが漂っていた。

「ようこそパンドラの箱へ。今日は何を占ったらよろしいですか？」

　俯き加減に目を伏せていた女性占い師が、信司を見据えると優しく訊いてきた。信司はその鋭い視線にドキリとした。目の前にいる女性占い師が、信司の心の中を見透かしているような気がしたからだ。

「私たちの恋愛運を占って下さい」

　明日香が哀願するように答えると、信司がすかさず「僕たちの将来を占って下さい」と横槍を入れた。そのときはただほんの遊び心だった。

「分かりました」

　女性占い師はゆっくり頷くと、目の前にある水晶玉に手を翳し、じっとそれを見詰めている。五分ぐらい経っただろうか、凄く長い時間が過ぎたように感じられた。女性占い師は信司に目を合わせると、冷静な口調で占いの結果を述べた。

「非常に悪い相が出ていますね。貴方たちはまもなく破局を迎えます。そしてどちらかにとても

不幸な出来事が起こるでしょう」
　あまりにも予想していない結果と簡単すぎる内容に、信じてはいないものの落胆せざるを得なかった。何気なく明日香の顔を窺うと、彼女の顔は真っ青になっていた。女性というのはどうしてこうも占いに弱いのだろう。しかし信司はそれを聞いてもまったく動揺しなかった。強いていわせてもらえば、初めての客なのだから、もう少し煽ててくれてもいいのにとさえ感じた。占いに来るにはそれなりの理由があって来るのだろう、今現在幸せならばその幸せはいつまで続くか再確認し、現状が不幸ならば、この不幸はいつまで続くのか見通しをたててもらいたい。自分の進む道に迷いが生じたとき、他人の手を借りてそれを解決したいと願うのは、人として当然の欲求だろう。それでも商業的に客を喜ばせる内容を期待していただけに、女性占い師の言動には違和感を覚えた。
「占い師さん、未来が分かるということは、当然過去も分かるということですよね」
　占いの結果に納得できなかったこともあり、信司は不躾に質問した。ノストラダムスの予言にしても、未来のことなんてあてずっぽうにいえば偶然に当たることもある。未来は誰も見てきたわけではないので、適当なことをいってもそれを確認することは不可能だ。しかし一個人の過去となると事情が違ってくる。ごまかしようがない。
「占いはその人の未来を予測するのが使命であって、過ぎてしまったことを述べるのは占いではありません。過去のことは自分が一番分かっているはずですよ」
　女性占い師に指摘されるまでもなく、過ぎてしまったことは誰よりも自分が一番認識していることだ。過ぎてしまったことを当てたところで、テレビなどでやるエンターテイメントにしかならないのが、現実であることはよく分かっていた。
「未来は分かっても過去は分からないということですか？」
　信司は皮肉を込めていった。ここまで向きになるのには理由があった。実はここに来る前、明日香に信司が占いを信じないことを知っていて、占いはそのときが来るまで分からないが、予めこの女性占い師は過去をも当てることができる、数少ない占い師だと聞かされていた。過去を見通す能力があるということは、未来を占う能力がより強調されるのだろう。この女性占い師が普通の占い師と違うのは、その特殊な能力を持っているからに他ならない。それでもそのようなことを簡単に信じることはできなかった。
　信司は決して捻くれた性格ではなかったが、気功師や霊能者のような、特殊な能力を持っている者が妬ましかった。それが本当か偽りかは別として、どんなに努力しても自分にはその能力は得られない。そう考えると超常現象的な出来事に対しては、否定する側に回るしかなかった。そのような考えから悪戯心もあって、女性占い師を試そうとした。
「貴方がそこまでいわれるのでしたら、この水晶玉で見てみましょう。簡単な質問をして下さい。分かる範囲でお答えします」
　信司の挑発にも女性占い師は穏やかな口調で答えた。思いも寄らぬ女性占い師の反応に動揺を隠すことができなかった。このときは何らかの方法で、自分の質問をはぐらかすであろうと予想していた。
「ではちなみに、僕には何人の兄弟がいるか分かりますか？」
　信司は試しに女性占い師に簡単な質問をしてみた。

「ちょっと待ってください」
　そういうと女性占い師はまた水晶玉に手を翳し、それをじっと見詰めた。そして「貴方に兄弟はいません。一人っ子です」と占いの結果を述べた。
「え・・・・・・」
　信じられなかった。女性占い師のいうように信司には兄弟がいなかった。
「僕の出身地は？」
　先ほどと同じように水晶玉に手を翳し「貴方の出身地はここから北西の方向にあり、雪が多い所です」といった。
　実家は長野の北の端、新潟との県境、黒姫というリゾート地で乗馬クラブを兼ねたペンションを営んでいた。この夏休みも実家に帰省したばかりである。
「僕の得意なスポーツは？」
　質問する度に女性占い師は、水晶玉に手を翳しそれをじっと見詰める。
「貴方の得意なスポーツはスキーです」
　実家のペンションは黒姫高原スキー場近くにあり、子供の頃から下駄代わりにスキーを履いていたため、高校時代はインターハイまで出場したほどの腕前だった。同窓生で同じスキー部の女子がオリンピック代表選手に選ばれ、現在はメーカーのデモンストレーターをしていることもあり、一時はオリンピックを目指したが、残念ながらオリンピックの道は考えていたより遥かに険しかった。国際的な大会はインターハイの比ではない。どう頑張ってもタイムは伸びなかった。挫折感はなかったが、今まで自分が一番だと思っていたところ、上には上がいるということを思い知らされた。東京の大学に進学してからは、殆どスキーをやらなかった。明日香は信司がスキーで滑るのを、一度だけ大学のツアーで北海道に行ったとき見たことがある。あまりの格好良さに信司が、まるで違う世界の人に思えたと信司に語った。二人でいるときは映画やアニメの話しかしたことがなかった。一見するとオタクに見えなくもない。しかし仲間同士で北海道に行き、自分の彼氏が皆の前で華麗に滑ったのを目の辺りにしたとき、本当に鼻が高かったと後で明日香は信司に打ち明けた。
「もう一つだけ質問が、彼女の出身地は？」
　女性占い師は同じ行動を繰り返した。
「彼女の出身地は富士山の向こう側、浜名湖から少し西に行ったところです」
　女性占い師は信司のときも場所ははっきり特定しなかったが、それでも方角は当たっていた。明日香の実家は名古屋にある。占いは統計学だ。人の過去なんて占いで分かるはずもないし、まして未来なんか予測がつくわけがない。何かトリックがあるに違いない。そう思いつつも、自分の信念が徐々に崩れていくのを認めざるを得なかった。
「どうして占いで過去まで分かるのですか？」
　信司の声は震えていた。
「人の運命は、この世に生まれ出たときからもう決まっているのです。それを私たち占い師が、この水晶を通して見ることにより、人の未来や過去が自ずと見えてくるのです」
　信司は以前テレビで、インドのある地方にその人の一生が、すべて木の葉に書かれているとう

いことを放映していた番組を思い出した。テレビというのはある種の不思議な力があり、催眠効果の如くそこに行けば、自分の運命も書かれた木の葉があるのではないかとさえ思えてしまう。まったくそういうものを信じていない自分が、何でそのときそう思ったのか今思い出しても分からない。それでも人の運命なんて一秒先すら分かるはずがないと自分自身で納得したかった。

信司は立ち上がると不躾に女性占い師の前にある水晶玉を覗き込んだ。しかしそこに写ったのは歪んだ自分の顔だけで、いくら目を凝らしても他には何も見えてこなかった。

「もう帰りましょう」

明日香にいわれて信司は我に返った。これは単なる占いなのだ。自分は何でこんなにむきになっているのだろう。後ろ髪を引かれる思いで占いの館を後にした。

二

明日香の住んでいるマンションは、女子大生専用のセキュリティーが行き届いたマンションのため、二人が会う場所はもっぱら東伏見の信司の安アパートや、近くの武蔵関公園だった。

信司は東都大学付属長野高校から、東京の東都大学に入学が決まったとき、母と二人でアパートを捜しに上京した。信司が決めたアパートは、大学まで自転車で通える距離にあった。トイレは共同で風呂は付いていない。六畳一間にキッチンが付いただけの貧相なアパートだった。七〇年代から八〇年代にはよく見かけた木造モルタルのアパートだが、最近は殆ど建て直しワンルームマンションになっていく中にあって、ここだけが時間に取り残されたように、住宅地の中にポツンと一棟だけ浮いていた。母は「こんなところで大丈夫なの？」と心配そうだったが、古さという点ではまったく気にならなかった。

信司は高校時代フォークに嵌った。かぐや姫や井上陽水の大ファンになった。信司には十歳上の従兄弟が長野市内に住んでいる。従兄弟の家に遊びに行くと、彼の部屋にはデイオンの大きなレコードプレイヤーがあり、七〇年代、八〇年代に流行ったポップスやフォークを聴かせてくれた。アンプはラックスマンの真空管アンプで、デジタル時代に育った信司には、レコードに針を置いたときの雑音でさえ新鮮に感じた。かぐや姫の神田川と赤ちょうちんには特に心引かれるものがあった。田舎の若者が都会に憧れるように、信司もまた都会に憧れていた。人というのは無い物ねだりで、都会に住んでいる者は自然を求め田舎にやって来るし、田舎に住んでいる者は都会に憧れ故郷を離れて行く。信司は自然の中で育ったため、尚更都会への憧れが強かった。かぐや姫の歌には、何もかも恵まれた環境で育った信司たちの世代では理解しにくいものの、貧しい故に男と女が一生懸命愛を育もうともがいている姿が、遠いおとぎ話のように思えてならなかった。

信司の父はペンションと鱒の養殖、乗馬クラブを営んでいた。そのため経済的には比較的恵まれた環境で育った。父大輔は若いころ乗馬の国体選手だったこともあり、乗馬はかなりの腕前だった。趣味としてオートバイのトライヤルをやっていたが、此方の方もかなりの腕前だった。今でもＨＯＮＤＡの古いトライヤル車が車庫に仕舞ってあり、信司は子供の頃から家の周りをこのトライヤル車で走り回っていた。

通っていた高校で免許を取ることは禁止されていたが、特例として信司のように、山間部に住み交通の便が悪い者には、原付だけ免許の取得が許されていた。しかし大輔は「原付はかえって危ない。どうせ乗るなら普通自動二輪以上の免許を取れ。学校の先生もここまでは調べに来ないだろう」というので十六歳になると普通自動二輪の免許を取得し、ＨＯＮＤＡのオフロードバイクを買ってもらった。

信司は子供のとき、馬から振り落とされた経験があることからそれ以来、馬には乗りたがらなかった。大輔も一時は信司を競馬学校に入れようと考えたが、信司の落馬の経験と、ジョッキーとしては身長が高い体格の息子の成長を目の当たりにして、諦めざるを得なかったようだ。

三

午前中の講義が終わると、信司は学食で昼食を済ませ、映画サークルの部室に足を向けた。学校の隅に位置するその部室は、運動部に比べると随分貧弱で狭い。サークルなんて正規の部と違って、学校側から沢山援助を得られる訳でもなく、ただ好きな者同志が集まってワイワイやるだけなので、学園祭以外御金がかかることは殆どなかった。

部室に行くと既にそこには明日香ともう一人、このサークルでは古株の吉沢美奈子がいた。明日香が来ていることは分かっていたので、部室に鍵を掛け二人でいちゃつきながら映画を観ようと考えていたので、ほんの少し残念に思えた。

「吉沢先輩いたんですか」

「何か私邪魔だったかしら？」

「いえ、そんなことはないですが・・・・・・。吉沢先輩就職活動の方は、捗っていますか？」

吉沢は四回生で、信司は吉沢に当たり障りのない質問をすることで、自分の嫌らしい考えを悟られないようにするしか方法が思いつかなかった。

「景気回復したといっても、なかなかいい仕事がなくて、取り敢えず地方のケーブルテレビ局をキープしてあるけど、できたら中央のテレビ局がいいんだけどね」

吉沢は明日香と同じ芸術学部映像学科で、卒業生はかなりの確率で放送関係に就職していた。

「吉沢先輩はマスコミ志望だったですよね」

「まあね」

吉沢は目鼻立ちが整いどちらかといえば細身の美人ともいえなくないが、どう見てもテレビ向けの雰囲気ではないように感じた。

「私退散した方がいいみたいね」

信司と明日香の関係はこのサークルでは公認だった。

「先輩そんないじめないで下さいよ」

吉沢には信司の嫌らしい考えが、見透かされていたのかもしれない。

「可世木君は大丈夫だと思うけど、浮気なんかしたら私が承知しないから。学生時代の想い出というのは、恋人がいるかいないかで大きく違ってくるんだから。時間がたっぷりあって、御金だって社会人よりアルバイトで稼げば学生の方がリッチだもの。本当に好きな相手なら毎日だって会っていられるし、それに朝から晩まで一日中エッチしていてもいいわけでしょう」

女性の口から露骨にエッチという言葉を聞いて、信司の方が恥ずかしくなった。

「そうなんですか？」

「そうに決まっているでしょ。私なんて半年前に男と別れたでしょう。新しい彼氏がなかなか見つからないと、あのとき楽しかったなあとか、食事をしていても彼が横にいたらなあとか、楽しいことばかり思い出して後悔ばかりよ。可世木君明日香を大切にしなさいよ。せめて大学生でいる間だけでもね」

信司はその意味ありげな言い方が少し気になった。『大学生でいる間だけでも』という言葉に

。
「大学生の間だけとは、どういう意味ですか？」
「別に意味なんかないわよ。私今就職活動しているでしょう。一人だと何かとてつもなく不安になるの。何ていうのかな、頭の中に靄が掛かったようなすっきりしない気分なの。この先どうなるのか、本当に仕事をして食べていけるのか。こんなこと考えるようになったのはつい最近のことよ。未来の不透明さが不安で仕方がないのね。そして振り返ってみると、彼と過ごした一年間が私の人生で一番楽しかったのではないかと。そしてこの先あんな楽しいことは二度と味わえないだろうと。可世木君大学生という生き物は、世の中で一番無責任な生き物なのよ。勉強にしたって高校生の頃の方がもっと勉強したし、仕事だってアルバイトだから、いつ辞めてもいいと責任感がないじゃない。恋愛だって中学や高校のときみたいに、好きな人の隣にいるだけで心がときめくような感覚はとうに麻痺しているし、今とても不安なのに慰めてくれる彼がいない。こんな悲しいことはないわよ」
　いつにない吉沢の真剣な眼差しに、圧倒されたと同時に、もしこの場に明日香がいなければ吉沢を抱き締められたのにと、なぜか吉沢を愛おしく思った。いつもは勝気な彼女が今日はとても弱い女性に見えた。男は強い女性より弱い女性の方が絶対に可愛いと感じる。
「御免ね、話が暗くなっちゃって。ねえ二人とも良かったらこれから家に来ない。いいDVD入ったの。家のプロジェクターで見たら感動するわよ。暗い話のお詫びの意味でもぜひ来て」
　先ほどの話が自分の恥部を見せてしまったと思ったのか、吉沢が少し照れているように感じた。
「行きます」
　断る理由はなかった。明日香も信司が行くというので一緒についてきた。吉沢の家は東京郊外東村山にあり、父母と兄の四人暮らしである。父親は銀行の重役ということで、かなり大きな家に住んでいた。吉沢の部屋は二階にあり、十畳はあろうか、かなり広い部屋だった。そして地下にはこの家自慢の広いシアタールームがあり、壁には大きなスクリーンが掛っていた。信司の家もペンションを営んでいたので、カラオケ用にプロジェクターが備えてあったが、それで映画を観たことはない。
「吉沢先輩凄いですね！」
　明日香も感動していた。
「父が映画マニアなの。だから私小さい頃から父と一緒に映画を観ているうちに、映画が好きになったのかもしれないわ」
　壁の棚には五百タイトルを超えるレーザーデスクやDVDが、ジャンルごとに陳列してある。今はレンタルが普及しているし、パソコンを使えばDVDなら簡単にコピーできる。このように自分でDVDを買え揃えるということは、かなり経済的に余裕があるのだろう。ひょっとしたら信司たちにそれらを見せびらかせたかったのかもしれない。そう考えると吉沢のお茶目な部分が見えておかしかった。
「吉沢先輩、今日は何を見せてくれるのですか？」
「キュウブリックの時計仕掛けのオレンジよ。君たち観たことある。キュウブリックの昔の作品

。結構ブラックが利いて面白いわよ」
「初めてです」「私は初めてです」
　信司と明日香は声を揃えていった。お互い顔を見合わせ笑った。信司も明日香も吉沢の家に来たのは初めてだった。いつもクールで格好良く写った彼女が、実はとても寂しがりやではないかと感じ、吉沢のシャイな部分が垣間見られた。
　後で明日香に訊くと、この映画はあまり好きでないといっていたが、久しぶりに面白い映画を観たような気がして満足だった。ただ何をしていても占いのことが気になって仕方ない。映画を観終わった後、吉沢に心の不安をぶつけてみた。
「吉沢先輩は占いって信じますか？」
　吉沢は突然の質問に面食らってしまい、どう答えていいか言葉を捜しているようだった。
「どうしたの？いきなり占いの話なんか持ち出して。まあ私は信じないわけではないけれど、それがすべてではないと思うわ」
「どういうことですか？」
「うん～。つまり自分の都合のいいことは信じて、悪いことは信じないということかしら」
　それなら理解できる。しかし信司はそのような答えを、吉沢に期待していたわけではない。論理的に科学的に説明して欲しかったのだ。
「実は先日中野にある占いの館に、明日香と行ったんですよ。それまで占いなんて全然信じていなかったのですが、そこにいた女性占い師に、僕たち二人の今後を占ってもらったら、二人はやがて破局を向かえるでしょう。というんです」
　そこまでいうと「ハハハ・・・・・・」と吉沢は大きな声で笑いだした。
「御免。御免。悪気はないのよ。ただ貴方たちが大学を卒業して結婚するならいざ知らず、いずれはそれぞれ別の道を歩むことになるかもしれないじゃない。そんな占いなら私にだってできるわよ。そんなこと気にしているの」吉沢は笑えを堪え信司にいった。
「いやそんなことはちっとも気にならないんですか、その後女性占い師に未来が分かるのなら、過去も分かるはずだと詰め寄ったら、僕と彼女の出身地、兄弟の数など僕の質問したことすべて当てたんですよ。どうしても単なる偶然とは思えなくて・・・・・・」
「本来占いは未来を予想するものであって、過去を当てるのは占い師の仕事ではないはずよ。まあそれはともかくとして、君のその話だけを聞いただけでは詳しくは分からないけど、それはやっぱり偶然と思うな。先ほど自分の都合のいいことは信じるといったけど、本当のところ占いはまったく信じていないの。興味はあるけどね」
　吉沢にいわれるまで気がつかなかったが、占い師と霊能者、或いは預言者と混同していた節がある。そういわれてみれば占い師は未来を占うものであって、その人の過去がどうであれ関係ないのだ。しかしなぜあの女性占い師は、過去のことまで分かったのだろうか、益々疑問は深まった。
「それはどういう意味ですか？」
　吉沢の意味ありげな言葉が、喉に刺さった魚の小骨のように気になって仕方ない。彼女の言っていることが、どういうことか理解できなかった。
「私自身、神とか仏とかの信仰心はまったくないけれど、人がそういうものに縋りたくなる気持

ちはよく分かるの。たとえば死んでしまったら魂は残るのか、そしてその魂はどこに逝くのかとかね。日本人って私みたいな無宗教といわれる人たちが殆どだと思うけど、それでも困ったときの神頼みとかいって、都合のいいときだけ神仏に祈るでしょ。占いも一緒だと思うの。以前、占いって何で人は信じるのか、特に女性は。よく女性週刊誌で特集組むでしょ。どうして女性はこうも占いに嵌るのかと思って、マスコミ志望の私も自分の運命を占おうとパソコンで星座占いだったかしら、自分の生年月日を入力して占ったのよ。そしてその結果を読んだら結構当たっているのよね。でもちょっと待てよと。私はもともと猜疑心が強いので、もう一度項目ごとに書き出そうと考え、当たっていたら○、違っていたら×と、紙に書きだしていったのよ。そしたらどうなったと思う？」
「分かりません」
　その話に信司は身を乗り出し聞いていた。
「その占いは指摘事項が二十三項目あって、あなたは負けず嫌いだとか、クラスや会社では人気者だとか、二十三項目のうち当たっていたのが八項目しかなかったのよ。半分も当っていないのになぜか、最初見たとき物凄く当っていると思ったのはなぜかしら。多分自分に都合の悪いことは頭に残らないのね。当っていることの方が強く頭に残るので、何だか凄く当っていると勘違いしてしまう。これが言葉でいわれれば、もっとそれらが強調されるのじゃないかしら。大体の人は自分の都合のいいことだけ信じて、都合の悪いことは聞かなかったことにする。私が思うには、占いはときの権力者が自分に人々が歯向かってこないように考えた、所謂己を守る処世術みたいなものだと思うの。邪馬台国の卑弥呼は呪術を利用して女王として君臨したし、今世界でキリスト教が物凄く広がったでしょう」
　吉沢はそこまで話すと信司の目を直視し、今まであまり他人に話したことのない、自分が抱いている宗教観を語りだした。
「キリストが現れるまでの宗教って、ときの権力者に都合のいいように操られていたんじゃないかしら。私、去年エジプトを旅行したんだけど、紀元前何千年も前の神話は、明らかにファラオに都合のいいような話になっているの。いつの時代でも支配者はきらびやかな装飾品を身にまとい、贅沢な暮らしをして民衆を自分の足元に平伏せさせる。当然こういう生活は人と生まれた以上皆が憧れる。誰でもすきあらば王位を狙っている。多くのファラオが暗殺された筈よ。権力者はその贅沢な暮らしが忘れられないんでしょうね。死んでもまたファラオに生まれてきたいと思う。それは今の時代でもそうだけど、今の生活が幸せならそれが永遠に続けばいいと願う。だから古代エジブト人は再生復活を願うのではないかしら」
　明日香は兎も角信司は、吉沢の話にいつのまにか引き込まれていた。
「吉沢先輩、王は何もかも恵まれていたから生まれ変わりたいと願うのは当然としても、奴隷みたいに虐げられた人々は、また奴隷に生まれてきたいと思うのですか？」
「可世木君いい質問ね。そこに当時の宗教事情があったのよ。私が思うには、おそらく生まれ変わりたいと願ったのはファラオやごく一部の権力者で、他の下層階級の人々は食べることが精一杯で、そこまで心のゆとりがなかったのか、或いはファラオが神から選ばれし者と本当に信じて疑わなかったのかそれは分からないけど、キリストが誕生するまで神の存在は、多かれ少なかれ

権力者に、都合のいいように解釈されていたとしても不思議ではないわ。占いも同じことがいえるかもしれないわね」
　現代に於いても時折、自ら神と名乗り少ないながらも、それを信じ敬い奉る信者もいるが、現実には何千年も前に生まれた宗教を信じる人が殆どである。それでも信仰心のない者にとって、たとえキリストだろうとブッダであろうと、それらは突然現れた新興宗教の教祖と何ら変らないのだ。それこそ信じる者は救われるのである。
「どういうことですか？」
「つまり占いは、宗教ほど力はないものの人々の心の迷いを解消すれば、人々の尊敬を受けるのは確かでしょ。それが当たるか当たらないかは別にして、昔の人がそれによって気持ちが楽になったのは間違いないと思うわ。雨乞いなんていい例じゃない。何日も雨が降らなければ作物は枯れてしまう。術師は雨乞いをする。何日もやり続けやがて雨が降る。術師が何もやらなくても雨は降ったと思うけど、学説によれば術師は気象学に長けていたのではないかといわれているけど、それを目の当たりにした民衆は、術師を神だと思っても不思議じゃないでしょ。それから医者が患者の顔色を診るように、占い師は医学にも精通していて、顔色や目を見てその人の寿命をも計れたかもしれないわね。それに今でも政治家や大企業の経営者が、占い師にその国なり、会社の行く末を占ってもらうということが現実にあるみたいよ」
　占いは単なる統計学と思っていたが、吉沢の話を聞いて占いの新たな一面を垣間見たような気がした。しかしどうしてあの占い師が自分のことを知り得たのか、どうしても分からなかった。明日香とはあれ以来占いについて話はしなかったが、かなり気にしていたのは信司にも分かった。
　その日は映画の話をするよりも、宗教の話で盛り上がった。ただ明日香だけはまったくといっていいほど、二人の話には加わらなかった。吉沢の家からの帰り道、少々ムッとしている明日香に話し掛けてみた。
「ああいう話って興味ないの？」
　明日香は質問を待ち侘びていたように「私は占いでも信仰でも、その人自身が信じて幸せならばそれでいいと思うの。オオムだって社会であんなに悪くいわれても、未だに信じている人がいるわけでしょ。その人個人が本当に信じているのなら、周りの人がとやかくいうべきことではないと思うわ」
　明日香の意見は意外なものだった。
「だってオオムなんかはテロリスト。いわば犯罪集団だぞ。それに信者は洗脳もされている。だから何が良くて何が間違っているのか、世間から隔離されているため分からないんだ」
「それだから余計に、ごく一部の指導者が行なったことで、他の信者に責任はないと思うけど。寧ろ指導者以外の信者も被害者じゃないかしら」
　これまでにも明日香と意見を交わし、賛同を得たことはあったが、これほど意見が噛み合わなかったのは初めてである。
　明日香の言葉はいつになく力が入っているように感じた。
「この前の占い、そんなに気にしているのか？」
　占いを気にしているのは寧ろ信司の方だった。

「あんな言い方されて気にしないほうがおかしいわ。私はあなたと別れる気はないから」
「僕だって占いなんて信じていないよ。ただ・・・・・・」
　そこまでいって信司は言葉を飲み込んだ。
「ただ何よ。あの女性占い師が当てた過去のことが気になって仕方ないんでしょう」
　明日香のいったことは図星だった。
「それは・・・・・・」
　信司は明日香に何を話したら自分の考えがうまく伝わるのか分からなかった。
「あれはまぐれとかじゃなく、あの女性占い師には本当に何か見えたのかもしれない」
　明日香に限らず女性というのは、目の前に起こった出来事を直ぐに信じてしまう傾向がある。
「明日香はさっき、僕とは分かれないといったばかりじゃないか」
　明日香のいっていることは、明らかに矛盾しているように感じた。
「未来は私たちが変えていけばいいこと。別れるといわれたら、別れないように努力すればいいのよ。だけど過去はもう変えようがないでしょ。あの女性占い師には、人の過去を見る力があるのかもしれないわ」
　信司は『そんなこと絶対にない』と反論したかったが、今の明日香には何もいわないほうがいいように思えた。

四

千種女子高等学校は名古屋市内を走る基幹バスの萱場というバス停を降り、名古屋ドームの逆方向に歩いた場所に位置していた。屋上からは名古屋ドームの全景が見ることができる。県内でも比較的名門といわれる女子高で、アイビー調のブレザーには、聖母マリアを刺繍したエンブレムが胸に施してあり、タータンチェックのスカートは、この辺りの女子中学生には絶大なる人気があった。カトリック系の学校で先生はシスターと呼ばれ、学校内には小さいながらも礼拝堂が設けられている。

放課後になると西校舎一階の音楽室から、心地好い吹奏楽の演奏音が響いてくる。どこにでもある風景がそこにはみられた。ここの学校は、生徒は勿論先生もすべて女性で、男性は一人として存在しない。夏目明日香は高校時代この女子高の吹奏楽部に所属していた。明日香の担当はトロンボーンで、中学のときもトロンボーンを吹いていた。吹奏楽部に明日香の一年先輩で森脇洋子というとても美しい女生徒がいた。洋子はフルートを担当していて、彼女が吹くフルートは彼女の容姿同様綺麗な音色だった。

明日香は洋子に対して強い憧れを抱いていたが、洋子に憧れを抱いていたのは明日香だけではない。男性が一人もいない閉鎖された社会に於いて、美しい先輩に憧れを抱くのは何も不思議なことではなかった。吹奏楽部の一部の者は、吹奏楽にそれほど魅力を感じているわけでもなく、ただ単に洋子の傍にいたいだけの者も入部していた。どこの女子高でもカリスマ的な女性がいて皆の憧れ、或いは恋の対象になることも稀にある。しかし女子高を卒業し男性社会に入っていくと、いつしかそんなことがあったことすら忘れてしまう。明日香も皆がそうであるように、綺麗な先輩に恋にも似た憧れを抱いていた。

運動部の部員は夏休みといえども練習のため学校に登校してくる。しかし文化部は夏休み中に学校に登校することは殆どなかった。明日香は学校に自転車で通える距離に住んでいたため、夏休みでも時折吹奏楽の練習のため学校に通っていた。目的は練習をするだけではなかった。

二年生の八月もまもなく終ろうという金曜日の午後、学校に行くと既に洋子が先に来てフルートを吹いていた。洋子が着ていた白いワイシャツは、太陽の光を浴び真珠のように輝いている。これほど白いシャツが似合う女性を、今まで見たことがなかった。

「先輩御苦労様です」

明日香は両手を下腹部の前で合わせると、ちょこんと頭を下げた。洋子が既に来ているであろうことは薄々分かっていた。

「貴女こそ練習熱心ね」

「マンション暮らしですから、家じゃとても練習なんかできないんです。たまに近くの川原に行って練習するんですけど、今の季節蚊が多くて」

明日香の話は少々所帯染みていた。

「良かったら今度私の家で練習しない。狭いけど一戸建てなので、少しぐらい大きな音を出しても大丈夫だし、昼間は家に誰もいないから」

他の者がいえば嫌味とも取れなくない言葉でも、洋子がいうとまったく嫌味に感じられなか

った。
「本当に先輩の家に行ってもいいんですか？」
　明日香は嬉しさのあまり、目に涙が潤んできたのを自分自身で感じていた。
「何なら今からでも私の家に行きましょうか。池下だからここから自転車で、三十分もかからないと思うけど」
　明日香は洋子の急の申し出に少々驚いた。こんなに近くに憧れの先輩が住んでいるなんて思ってもみなかった。明日香も、洋子も、自前の楽器だったが、学校の楽器でも、部員は家に持ち帰って練習をしても構わないことになっている。洋子はフルートを分解してケースに仕舞うと、二人は音楽室を出て行った。洋子のフルートは自転車の籠に乗るが、明日香のトロンボーンは籠に入らず、母に楽器を入れるショルダーバックを布で作ってもらい、それを背負って自転車に乗った。
　洋子の家は学校から自転車で二十五分の位置にあった。八十坪ほどの土地に五十坪ほどの建物が建っている。比較的裕福に見える家の造りだったが、明日香はもう少し大きな豪邸を想像していた。洋子の容姿、仕草はどこから見ても、育ちの良さが滲み出ていたからだ。しかし想像とは多少違っていたため少し安心した。二人は車庫横の自転車置場に自転車を置くと家の中に入って行った。
　玄関は吹き抜けになっていて、洋子の部屋は二階にあった。二階には部屋が三つあり一つは兄の部屋で、一つは父の書斎だと洋子が教えてくれた。洋子の部屋には薄いベージュ色のカーテンが掛かっていて、ベットカバーはミッキーマウスの絵柄だった。造りつけの棚には沢山のぬいぐるみが置いてあり、明日香は洋子の意外な一面を垣間見た気がして、何か分からないが嬉しかった。洋子の部屋はロココ様式風の部屋ではないかと、勝手に想像していた。
　部屋に入ると直ぐ洋子は、エアコンのリモコンスイッチを押した。生暖かかった部屋が徐々に冷やされていく。洋子も明日香も自転車を漕いだせいもあり、身体が汗で多少湿っていた。エアコンが効いてくると、部屋はほのかなハーブの香りがして心地良かった。
「貴女もここに座ったら」
　洋子はベッドに腰掛けると左手で自分の横を指した。
「私はここでいいです」
　明日香は恥ずかしさもあって、絨毯敷きの床に腰を下ろそうとした。
「ねえ、私の横に来て」
　優しい洋子の声に誘われるように、明日香は洋子の横にほんの少し距離を開け遠慮がちに座った。憧れの先輩が直ぐ側にいる。このとき明日香は緊張と興奮の頂点にあった。
「貴女、彼氏いるの？」
「彼氏なんかとんでもないです」
　洋子の不躾な質問に少々面食らった明日香は、恥ずかしそうに下を向いた。
「彼氏欲しくないの？」
「私なんか男の人振り向いてくれません」
　このとき明日香は謙遜していったのではなく本当にそう思っていた。自分みたいな者に彼氏な

んかできるわけないと思った。
「そんなことないと思うわ。貴女は十分魅力的な女性よ」
　そういうと洋子は明日香の肩に手を回し頭を優しく撫でた。明日香は突然の出来事に身体が硬直してしまい、洋子の真意を推察することはできなかった。洋子は明日香との少ない空間を詰めると、肩に置いていた左手で明日香の顔を洋子の方に向けさせた。
「目を閉じて」
　明日香はいわれるがまま素直に目を閉じた。唇に生暖かい感触と、ほんのかすかな息遣いを感じたが、怖くて目を開けることができなかった。自分より細い腕で抱きしめられ、今度は耳元に荒い息遣いが伝わってきた。
「緊張しないで、すべて私に任せて」
　そう呟くと洋子は再び明日香に唇を重ねた。明日香にとって初めての経験だった。その初めての接吻が女性だったことは、明日香にとって幸福だったのか、不幸だったのか、そのときの明日香に分かるはずもない。少女マンガによくこのようなシチュエーションはあるが、自分自身がこのような体験をすると、緊張と動揺のあまり相手のなすがままになって抵抗することすら忘れてしまう。洋子は明日香のブラウスのボタンを一つ一つ外し、ブラジャーのホックも外した。
「先輩！」
「心配しないで、怖くないから」
　洋子の前に明日香のまだ未成熟な乳房が露わになった。
「綺麗なオッパイ」
　もう明日香は自分でもどうすることもできず、洋子のされるがままになっていたが、それでも嫌だとは少しも思わなかった。洋子は明日香をそっとベッドに寝かせると、明日香の着ていた服をすべて剥ぎ取ってしまった。そして自らも着ている服をすべて脱ぎ、明日香の前に立った。
「明日香私を見て」
　それまでずっと目を閉じていた明日香だったが、洋子のその一言で目を開けた。そこには美しい女性の裸体があった。肌の色は透き通るように白く、胸は大きくもなく、小さくもなく、均整のとれた乳房は富士山に似ていた。
「私綺麗かしら？」
「綺麗です」
　お世辞ではなく本当に綺麗だと思った。男でも女でも神が創ったのではないかと思えるほど、整った容姿と均整のとれた肉体を持っている者が稀にいる。そのような者を明日香は初めて間近で見たような気がした。
　洋子は明日香の横に寄り添うと、終わりのない愛撫を始めた。足の爪先から耳元まで洋子の愛撫は明日香の産毛を濡らした。明日香はオナニーもしたこともなければ、男に抱かれた経験もない。明日香にとってそれは決して気持ちいいものではなく、ただ恥ずかしいことでしかなかった。しかしその後も二人の関係は続いた。明日香はどうしても洋子の要求を拒むことができなかった。
　禁断の蜜の味は回を重ねるごとに美味しさを増していく。女子高という閉鎖された社会で、男性に接触できる機会がまったくない明日香にとって、それはまさしく魅惑の味だったのかもしれ

ない。
　男性経験のない明日香にとって、洋子は初めての性の対象者であったが、明日香自身が洋子のように、男性を受け入れないわけではなかった。後から考えれば自分がバイセクシュアルであったことは間違いないが、それとて洋子の存在がなければ、自分の中にそのような感情があることすら気がつかなかったと思う。
　洋子は女性である明日香の眼から見てもとても魅力的な女性だった。彼女に抱かれると、自分も彼女みたいに美しく魅力的になれるのではないかと思ったこともある。洋子は明日香に恥ずかしさを通り越し女の喜びを与えてくれた。学校にいるときの洋子は、気高く気品に満ちて近寄りがたいほど皆の憧れの対象だった。それが明日香と二人きりになると、激しく淫乱な女へと変貌していく。洋子の過去に何があったのか、洋子自身も口にしないので、明日香は一人の女性がこんなにも変わるのを目の当たりにして、不安と嬉しさが入り交じり妙な気持ちになっていった。
　本来同性愛者は相手が同性のため、何をして欲しいのかよく心得ている。明日香も最初のうちは恥ずかしさもあって、ただ受身でいるだけであったが、時間の経過に伴い、自分が相手にしてもらって気持ちいいことを、相手にしてあげるようになると、二人の関係は一層深まっていった。
　明日香は自分が女子高に行きたくて、女子高に進学したわけではない。母親の達ての希望で女子高に進学することになった。中学から続けていた吹奏楽を選び、高校の吹奏楽部に入部した。その部に一年先輩のフルートを吹く、とても綺麗な女性洋子がいた。最初部室に入ったとき、この学校にこれほど綺麗な人がいることに驚きを覚えた。明日香は宝塚や同性に対して憧れを抱くことはなかったが、なぜか洋子に対しては、素敵な男性に抱く同じ感情を持ってしまった。洋子には魔性の美しさがあった。同性愛者でない自分が、洋子の魔力に取り込まれていくことに、何の迷いもなかったわけではない。しかしそれを拒否できない不思議な力が洋子にはあった。男性と経験のない明日香は、自分でも気づかないうちに、妖艶の世界に迷い込んでいた。洋子との関係は一度身体を許してしまうと、その回数は日増しに増え、愛撫の仕方も段々エスカレートしていった。洋子の透き通るような白い肌に、明日香の濡れた舌を這わせると、洋子はことのほか悦んでくれた。しかし洋子にいくら好かれようと、私が本当に愛せるのは男性であって、今愛撫しているこの女性を、心の底から愛していないのではないかという疑問は常に持ちつづけていた。洋子との関係は本当に行きたい旅行ではないが、行ってみたら意外と楽しめたというような感じだった。しかしそれはいつでも帰れるという保障が付いてであって、二度と引き返せないと分かったなら、その旅行には参加しなかったであろう。
　男性の気持ちは明日香の知るところではないものの、おそらく男性の目から見ても、洋子の持つ妖艶な美しさは魅力あるものに違いない。子供の頃テレビで観た雪女に洋子は似ていた。雪女のように肌が白くて美しい。何か分からない不思議な魔力が備わっていた。このままずるずると関係を続けていいのか、おそらく自分の中では既に結論が出ているはずなのに、どうしても洋子の要求を拒むことのできない自分がいた。
　冬休みに入ったとき、洋子が東京の大学に進学すると突然いいだした。寝耳に水とまではいわないまでも、かなり驚いたのが正直な気持ちだった。名古屋という場所柄、東京まで行かなくて

も大学は沢山ある。それなのになぜわざわざ東京まで行くのだろう。洋子の学力はかなり高いようだが、それでも名古屋にもいい大学は沢山ある。自分のどこかに早く洋子との関係を断ち切りたいという感情もあったのだろうが、そのときはなぜか凄く寂しい気持ちになった。

「先輩はどうして東京の大学に、進学しようと思ったのですか？」

　明日香は自分の疑問を正直にぶつけてみた。

「それは・・・・・・」

　少し考えた後洋子は重い口を開いた。

「両親に私が同性愛者であることを知られたくないからよ。私が女性しか愛せないことは、何ら後ろめたいことではないけれど、今の日本の社会に於いて私たちは異端だと思うの」

　洋子は私たちといったが、その中に明日香が含まれているのか疑問だった。洋子はおそらく明日香も同性愛者だと思っているようだが、私は違うのだと洋子に対して主張したかった。もしかりに洋子と出会う前、自分が心から愛せる男性に出会い、そのような関係になっていたら、洋子がいくら素敵な女性であっても、今の関係にはならなかったのではないだろうか。洋子に抱かれるまで異性同性問わず、性の知識がまったく無かったことは、明日香にとって悲劇だったかもしれない。

　洋子が嫌いになったわけではない。寧ろ愛おしいとさえ思える。それはまさにエデンの園の禁断の実を食べたイブの心境だった。心のどこかにある罪の意識とでもいおうか、後ろめたさが、洋子がこのまま東京に行ってくれれば、解放されるのではないかというある種の期待も少なからずあった。それでも口から出た言葉は本心ではなかった。

「先輩が東京に行ってしまったら、私はどうしたらいいのか分からない」

　なぜこのようなことを口走ってしまったのだろう。

「貴女が迷惑でなければ、この関係は永遠に続くのよ。一年だけ我慢して。その後東京に出て来ればいいわ。私も夏休みと冬休みはこちらに帰ってくるから」

　このときの洋子の言葉は、ある種の催眠効果となって明日香を拘束した。大学に進学することは決めていたものの、愛知県以外の学校は考えられなかった。明日香には姉が一人いて現在岐阜の女子大に通っている。このときから明日香はあらゆる手段を講じて、東京の大学に進学することを決意した。ただ東京に出たいといっても、親は簡単には許してくれないだろう。それならば絶対東京でなければならない大学を見つけなければならなかった。洋子はカトリック系、名門女子大の音楽学科に行きたいといっていたが、明日香の両親はその程度の大学では東京行きの許可を取り付けることはできないような気がした。そのような大学なら東京に行かなくても、地元に似たような大学がある。簡単に東京に出させてくれる洋子が羨ましく思えた。明日香は自力で東京の大学を調べ、やっと一つの大学を見つけ出すことができた。東都大学芸術学部映像学科。この学部の卒業生はかなりの確立でテレビ業界に就職している。講師に現役のテレビプロデューサーもいる。東京にあって名古屋にない大学で、尚且つ明日香の学力で入れそうな大学はここしかなかった。

　同性愛者でない明日香が、なぜ洋子のためにそこまでしなければならなかったのか。人が人を好きになるということは、異性同性問わず初めは憧れからくるものが多い。とくに同性の場合その傾向が強いのではないだろうか。洋子の容姿は他のどの女子よりも異彩を放っていた。それに

もまして彼女の吹くフルートの音色は鳥肌が立つほど美しかった。このフルートの御陰で名門女子大の音楽学科に入ることができたのだ。その音楽センスもさることながら、彼女の話す言葉一つ一つが教養の高さを示している。

明日香は洋子の運動している姿を見たことはなかったが、噂では学内で一番足が速いということだ。このように完璧な女性を今日までお目にかかったことがない。その完璧な女性が何で私のようなものを選んだのか不思議に思い、一度洋子に訊いたことがある。

「貴女はとても素直で心が綺麗だからよ」

そのとき洋子は何の迷いもなく答えた。親や友人から優しい子だねといわれたことはあったが、心が綺麗だねといわれたのは洋子が初めてだった。それはどんな褒め言葉よりも嬉しかった。女子高というところは表面上華やかだが、裏へ回れば妬みや陰湿ないじめが蔓延っている。そのような女々しい生徒を見ていると悲しくなる。その中にあって洋子は聖母マリアのように優しさを兼ね備えていた。そんな聖女から声を掛けてもらうことは、この上もない喜びに違いない。

明日香は夏休みや冬休みに帰省した洋子と、栄や大須でデートするのが何よりも楽しかった。明日香が目的の大学に合格し東京に上京してからは、一週間に一回は洋子のマンションへ泊まりに行った。

大学生になって明日香が一番驚かされたのは春の学園祭である。女子高時代他校の学園祭にはまったく行ったことがなかった。明日香の通っていた女子高の文化祭は地味なものだった。吹奏楽の演奏会や演劇の上演など、本当の意味での文化祭だった。しかし大学の学園祭はまったく様相が違っている。日本一のマンモス大学の学園祭は、まるでおもちゃ箱をひっくり返したように賑やかだった。学内を着ぐるみを着た学生が走り回ったり、中央のメインステージでは、一流アーティストのコンサートが催されたり、学内にあるテレビスタジオでは、学生によるバラエティーショーが催された。右を見ても左を見てもビックリすることだらけだった。大学ってこんなに楽しいところなのかと初めて知った。女子高しか知らなかった明日香の中にある、おとなしい感情が弾けたような気がした。それまでは殆ど男性と話しすらできなかったのに、少しずつではあるが男性とも話ができるようになり、自分は本当のところ同性愛者ではないのだということを、改めて認識することとなった。

髪にパーマをかけ初めて化粧をしたときのように、自分の考えがこれほど変化するとは思ってもみなかった。東京という街にもある種の魔力があった。私はおそらく昔から心のどこかで、この東京の街に対して憧れを抱いていた。しかし東京には行けないだろうという漠然とした思いがあった。それが洋子の誘いもあって、自分の要求に拍車がかかり止めることができなくなった。名古屋から新幹線に乗り横浜を通過して東京に近づいて来ると、名古屋とは違う大都会の魅力がそこに存在していた。ニューヨークやパリ、ロンドンとは違う何かごちゃ混ぜになった長崎ちゃんぽんのような街だが、それはそれで魅力があった。

月日が流れても新幹線で東京に近づいてくると、なぜかわくわくしてくる。井の中の蛙という諺があるが、まさに明日香は井の中の蛙だった。洋子との関係は続いていたものの、高校のときのように洋子がすべてというわけではなくなっていた。大学のサークルに入って暫くすると、一人の男子学生が気になりだした。今まで精神的なものも、肉体的なものも、すべて洋子に依存して

いた。それは自分の意志ではなかったと最近ようやく気づいた。それは意志の弱い明日香が洋子に屈した。悪く言えば犯されたようなものだ。私は今までときの川にただ流されていただけで、自力で歩いていたわけではない。
　大学に入学して一年が過ぎた頃、野暮ったい男たちしかいないと思っていた映画研究会には似つかわしくない、スマートな男が入部してきた。このサークルで半数の男たちが明日香に興味を持ち、モーションを掛けてきたが、明日香は尽く撥ね付けた。それまで男をまったく知らなかった明日香は、男のあしらい方も分からなかった。そのあまりにものぎこちなさに、男たちも諦めるしかなかったようだ。そんな中で一年遅れて入部してきた男は、明日香と一緒で地方出身者なのか、なかなか皆の輪の中に溶け込めず、暫くの間浮いていた。
　明日香が入部し一年経った春の学園祭で、サークルはこのとき映像学科の試写室で、昔懐かしい映画の上映会を行なっていた。『ジョニーは戦場に行った』『暁の七人』『西部戦線異状なし』イラク戦争に抗議する意味もあり、学生が選んだ反戦映画だった。映画研究会といっても、自分たちで映画を作ることはない。以前は８ミリを使って自主映画を作った時代もあったようだが、現在そのような情熱を持った部員はいなかった。
　その日試写室の入り口で簡単なパンフレットとアンケート用紙を渡すために、明日香は受付係として座っていた。明日香の受け持ち時間は、午後二時から三時までの一時間だった。たまに映画について質問してくる者もいたが「パンフレットに解説が載っているので、そちらを見て下さい」というしか答えようがなかった。そんな中にすらっとした、顔立ちが可愛い男子学生が明日香に声を掛けてきた。その頃は明日香も何とか男性と話ができるようになっていた。
「あの、このサークルに入部したいのですが、どうしたらいいのですか？」
「君新入生？」
　明日香はその男子学生が、てっきり新入生と思い込んでいた。
「いや。僕は二回生です」
「あらそうなの！御免なさい。てっきり新入生と思ったものだから。今までサークルとかには入っていなかったの？」
「ええ」
「入部するのは簡単よ」
　そういうと入部用の用紙を男子学生に差し出した。
「これに学部と学年、学籍番号、名前と住所、あと電話番号を書いてそれで申し込み終了。今からでも部室に来てもらってかまわないわよ」
　男子学生はその場で必要事項を記入し明日香に渡した。申込用紙には経済学部二年、加世木信司と書かれてあった。それは明日香が初めて信司に会った瞬間である。
　入学して一年経っているにも拘らず、信司はまだ学校に馴染めず、どう見ても新入生にしか見えなかった。部室には頻繁に顔を出すが、何かいつももじもじしていた。明日香自身やっと男性と話ができるようになったばかりなのに、なぜか吉沢は明日香に信司の面倒をみるように言い付けた。
「貴女たち同じ県民でしょ」
　後でそのことを信司に確かめると「僕は長野出身です」といった。どうやら吉沢は長野と名古屋を取り違えた

らしい。それでも明日香にとって信司は気になる存在になっていった。我の強い男子学生の中にあって、あまりにもナイーブな信司が愛おしかった。

五

信司は吉沢の自宅で映画を観た翌日、吉沢の携帯に電話をした。
「吉沢先輩。加世木です」
「あら加世木君。どうしたの。何か用？」
信司が吉沢に電話をしたのはこれが初めてだった。
「昨日はどうも。映画とても良かったです。ところで先輩今どこにいるんですか？」
「学生課よ」
「ちょっと会って話したいことがあるんですが。樫の木で待っていますから来て下さい」
樫の木は大学構内にある喫茶店で、他に栗の木、柿の木、胡桃の木と喫茶店が全部で四つある。樫の木はその四つの喫茶店の中では一番小さな喫茶店で、学生課の直ぐ近くにあった。都内でもかなり広い敷地を有している、この東都大学も老朽化し痛みが酷いため郊外への移転が決まっていた。信司が今いるゼミ棟と、吉沢がいる学生課は建物が隣同士だった。喫茶樫の木に入ると、吉沢はもう先に来て席に着きコーヒーを頼んでいた。
「済みません。吉沢先輩」
信司は吉沢の前に来ると、頭をちょこんと下げ吉沢の向かいに腰掛けた。
おそらくこの学校の女子生徒と思われる、アルバイトのウエイトレスにホットコーヒーを注文した。予め入れてあったのか、直ぐにコーヒーを持ってきた。
「どうしたの？」
信司はガラス製のミルク入れに入れたミルクを、全部コーヒーカップに入れると、スプーンで軽くかき混ぜ半分ほど一気に飲んだ。そしてカップをソーサに戻すと唾を飲み込んだ。
「実は僕と昨日話した占いの館に行ってほしいんです」
吉沢は信司の突然の申し出に、少々戸惑いを感じているようだった。
「今直ぐに？」
「今日じゃなくても、近いうち都合のつく日でいいですから」
「明日香にはそのこと話してあるの？」
「いえ、明日香には何も話していません」
吉沢は呆れたというように信司の目をじっと見詰めた。「加世木君、君の好奇心は止められそうにないわね。いいわよ。今からでも君に用事がなければ行きましょう」
「本当ですか先輩。今直ぐ部室に行ってヘルメットを取ってきます」
「もしかしてオートバイで行くの？」
「駄目ですか？先輩今日スカートじゃないから、いいかなあと思ったんですけど」
吉沢は普段スカートを殆ど穿かなかったが、この日もジーパンにポロシャツという出で立ちだった。
「いいわよ。君のオートバイに乗るのは初めてね」
明日香とは付き合いだした頃何度か信司のオートバイの後ろに乗ったが、信司の運転が荒いこともあり、あまり後ろには乗りたがらなかった。信司は吉沢と身体が密着できるという下心もあ

って、敢えてオートバイに誘った。

　西武新宿線で新井薬師前まで行き、そこから十分も歩けば目的の場所はあったが、信二は敢えてオートバイで行くことにした。東京都内は鉄道や地下鉄が、網の目のように張り巡らされているが、それでもオートバイの利便性には敵わない。占いの館は前回明日香と行ったときと違い客が沢山いて、目当てのパンドラの箱も客が行列を作っていた。待ち椅子に座れないくらい客がいたため、店側は客に整理券を配り、時間になったら携帯に連絡を入れてもらうことになった。店側からは一時間以上待たなければならないということで、取り敢えず同じビル内にある喫茶店で時間を潰すことにした。そのときは喉に刺さった魚の小骨を取ることだけに、気を取られているような感じだったのだろう。

「吉沢先輩済みません。わざわざこんなところまで連れてきたうえに、また喫茶店に入り一時間も待たせることになってしまって」

　信司はおしぼりで手を拭きながら済まなそうに頭を下げた。

「雑誌では見たけど、これほどの人気とは思わなかったわ」

　信司は最初明日香に、この占いの館に連れてこられたとき、まさかもう一度ここに来るとは思ってもみなかった。占いなんてまったく信じていない自分が、またこうしてここに来てしまったことにふと気がついたとき、信司自身が驚かずにはいられなかった。喫茶店に入って一時間くらい経った頃、占いの館からもう直ぐ順番ですと携帯に連絡が入った。

　見覚えのある黒塗りの厚いドアを開けると、先日と同じく全身黒ずくめで、顔をベールで隠した女性占い師が椅子に座って客を待っていた。露出しているのは目だけだが、先日の女性占い師に間違いない。信司は先日、明日香と来た客だと気づかれないように、女性占い師を直視せず下を向いていた。信司と吉沢は女性占い師の前の椅子に座った。

「今日は何を占いましょうか？」

　信司は下を向いたまま相手に、先日明日香と来たことを悟られないように、質問は吉沢だけが答えるようにと予め打ち合わせをしておいた。

「あの私たちの今後を占って下さい」

　おそらく今まで何百人という恋人たちが、同じ質問をしてきたに違いない。

「分かりました」

　女性占い師は目の前にある水晶玉に手を翳した。毎日沢山の人が来るのだ。以前自分がここに来たとは分かるはずはないと高を括っていた。暫くすると水晶玉を見ていた女性占い師は信司たち二人を見て、「貴方たちは恋人同士ではありませんね。どういった意味で二人の今後を占えばいいのですか？」そのようにいった女性占い師の言葉を聞いて少なからず驚いた。しかし吉沢は「そんなこと、どうして分かるのですか？」と何の動揺もしていないというように、女性占い師に質問した。

「貴方たちの姿をこの水晶玉を通して見れば、自ずとその人の真の姿が見えてきます」

　女性占い師はこのような質問を何度となくされるのか、非常に落ち着いて吉沢の質問に答えた。

「貴女には未来が分かるのですか？」

「私は占い師です。預言者ではありませんので、未来が分かるはずはありません。しかし個人的なことであれば、この水晶玉を透してある程度予想することはできます」
「その人の未来が予想できるということは、過去も分かるということですか？」
　吉沢は信司と同じような質問をした。
「その人の過去を全部知りえることは不可能です。しかし人の運命というのは、生まれたときからある程度決められているのです。ですからほんの一部分であれば、私でも分かるかもしれません」
　先日明日香と来たときよりは大分謙遜しているような口振りだが、過去が分かるという自信は変わりないように思えた。
「では因みに私の職業は何ですか？」
　吉沢は徐に女性占い師に訊いた。分かりました。見てみます。そういうと女性占い師は水晶玉に手を翳し、それをじっと見詰めた。暫くして「貴女は大学生で今就職活動をしていますね」
「はい。確かに私は大学四年です。では私には半年前に別れた彼がいますが、その人の名前は分かりますか」
「それは分かりかねます」
　女性占い師は迷わず即答した。吉沢は他に父の職業、兄妹のこと、今日の穿いてきた下着の色と、ごく簡単な質問をした。下着の色は分からないと回答したが、後は父が銀行に勤務していること、兄妹は兄がいるということは確かに当たっていた。こんな馬鹿げた質問をしても、女性占い師は嫌な顔をせず誠実に答えてくれた。
「貴女は素晴らしい占い師です」
　吉沢は全然動じることなく、女性占い師を絶賛した。
「ありがとうございます」
　その後吉沢は就職活動がどうなるのか占ってもらい、女性占い師は「希望の仕事に就けるでしょう」と回答した。
　信司はお金を払い吉沢と占いの館を後にした。
「偶然でもなければ、まして超能力でもないわね」
「どういうことですか？」
「今直ぐ答えは出せないけど、少しだけ待ってくれる。ちょっと確かめておきたいことがあるの。それを確認したら種明かしをしてあげるわ」
　勿体ぶっているのか、確証が得られないからなのか、教えてくれなかったが、どうやら吉沢にはトリックか何か分かったような口振りだった。

六

白鳥優輝が中学校に行かなくなったのは、入学してクラス全員の顔と名前がやっと一致したころである。クラスで酷いいじめにあったからだ。その原因は自分でもよく分かっていた。優輝の母、美佐江は所謂水商売で新宿の高級クラブに勤めていた。以前は銀座にもいたことがあったようだが、どうも自分には銀座の水は合わないと感じ銀座を離れた。昼間はずっと家にいて、夕方になると綺麗に着飾りこのマンションを出て行く。

今住んでいるマンションはバブルが弾け不動産が下落した後、かなりリーズナブルな価格で新築に近い中古物件を、銀座時代のお客である不動産屋に見つけてもらい購入した。

銀座時代のホステス仲間にはお金を貯め、自分で店を持とうという者も少なくなかったが、美佐江には何よりも息子と落ち着く場所が欲しかったと、よく幼い優輝に聞かせていた。

優輝は自分の父親を知らない。ただ自分の顔立ちがあまりにも日本人離れしていたため、もしかしたら父親は外国人かもしれないと想像した。美佐江にも疑問をぶつけたことがあったが、あっさりと否定された。美佐江は確かに美人だが、それでも優輝の顔立ちとは明らかに違っている。優輝は小学校のときから、外人とか、混血とからかわれた。中学校に入学すると、からかいは更にエスカレートし、いじめへと発展していく。

子供は多かれ少なかれ、何か差別できる対象を見つけてはいじめをするものだ。それがたとえ身体的な特徴であっても、いじめる側の人間にとって罪悪としての認識はまるでない。当然そのような親なら自分の子供が学校側から注意されても、自分の子供の非を認め子供を叱るようなことはしないだろう。逆に学校で差別的扱いを受けたと、教育委員会などに訴えるかもしれない。

顔が小さく整って、中学一年生にしては背が高く何かと目立ったため、女子たちからは羨望の眼差しで見られた。それが、かえって男子たちの逆鱗に触れたようだ。

入学して直ぐに、女子の前でズボンとパンツを脱がされた。そのときの女子の態度が余計男子たちの憎しみに火を注ぐこととなった。「白鳥君が可哀相だわ」と女子たちが文句をいった。男子たちは優輝が困って惨めになる姿を女子たちに見せたかったのに、逆効果になってしまった。その後は女子のいない場所でいじめを受けるようになった。男子便所に連れて行かれると、便器の中に顔を突っ込まれたり、生徒手帳を小便の溜まった便器の中に放り込まれたりした。自分がやられれば一番いやなことを優輝に強要した。

美佐江は昼間空いているので、授業参観にはできるだけ顔を出すように心掛けていた。しかしそのときの格好はいかにも水商売ですという派手な服装だった。美佐江の周りにいる親たちが「やだわ、こんな格好をしてよく学校に来られるわね」と囁いているのが聞こえてくるようで、それは優輝にはとても苦痛なことだった。それでも美佐江に学校へ来ないでとはいえなかった。

肉体的な暴力だけに止まらず、言葉の暴力も凄まじかった。

「お前のお袋チイママなんだろ。男にオッパイやお尻を触らせて金取るんだろ。こいつの親売女だぜ。それだったらこいつは売女小僧だな」

そのようにいうと皆で笑い飛ばした。いじめっ子らにリークしたのは、この子等の親に違いない。下卑た言葉に一瞬殺意さえ覚えたが、そのときの優輝にはまだその力がなかった。

優輝にとって学校は地獄になった。悩んだ末担任の中年女性教師に相談すると、確認してみるからと安請け合いしたものの、結局何もしてくれなかった。美佐江にいうと「優ちゃん男前だから皆妬むのね。行きたくないんだったら学校なんか行かなくてもいいわよ」といってくれたため、月が替わるのを待たず学校に通うのを止めた。

七

美佐江にしてみれば母子家庭であるうえ、優輝が学校でいじめられ登校拒否になってしまったことは本意ではない。自分自身高校に進学したものの、学校生活に嫌気が差し、直ぐに自主退学してしまった苦い経験がある。せめて優輝だけには高校だけでも卒業して欲しいという思いがあった。

水商売を何年も続けて、それこそ人生の表も裏も見てきた。だから優輝が学校でなぜいじめに遭ったのか、学校側から説明を受けなくてもだいたいの見当はついた。仕方ないとは思いたくないが、いじめが始まってしまった以上どうすることもできないのが現実である。優輝を傷つけないためには、学校に行かせないのが一番いいような気がした。優輝は小学校のときはとても成績が良かった。勉強もそれほど嫌いには思えない。

教養はその人にとって一つの財産に他ならない。美佐江が美しい容姿を持ちながら、銀座でやっていけなかったのは、教養がなかったからだと自覚している。そのせいかは分からないが、優輝には教育をきちんと受けさせたかった。

美佐江は家庭教師派遣会社に家庭教師を依頼した。週四日数学と英語を教えてもらうことになった。本人も英語に興味を持ち、家庭教師である女子大生が持ってきたピーナツのマンガ英語版を、自分で訳しては読んでいた。

何もなく普通に学校に通っていれば、おそらくクラスでも成績がトップクラスになれたのではないかと思うと、優輝が気の毒でならなかった。

美佐江は夜の仕事だったため、夕方に来る家庭教師夏目明日香とは、すれ違いになってしまう。自分とは違い育ちの良さが顔に表れている。優輝も彼女になついているように見受けられた。最初明日香は優輝を見て少し驚いていたようだ。自分の息子ながら『小さな恋のメロディー』のマークレスターに似ているその容姿はとても美しかった。優輝の父親は本人が思っているように日本人ではない。美佐江は高校を中退すると、新宿のスナックで働いていた。休みの日はコマ劇場前にあるディスコに通った。そこで知り合ったのが、アメリカ海兵隊のマイクだった。マイクが所属している基地は御殿場にあった。演習が休みの日仲間と新宿まで遊びに来た。しかし美佐江が身ごもると、本国へ帰ってしまったきり連絡が取れなくなった。マイクは帰国するとき必ずミサを呼ぶからと約束したが、それは口からの出任せだったのだろう。二度とマイクに会うことはなかった。

元々両親には見捨てられていたが、それでも孫の顔を一目見ようと病院まで見舞いに来てくれた。しかし時間の経過とともに優輝の顔が落ち着いてくると、明らかに日本人とは違う顔立ちを見て、両親は美佐江に詰め寄った。父は優輝の父親は誰かと問いただした。正直に答えると二度と娘の前に顔を見せなかった。

八

　優輝にとって明日香は単なる家庭教師ではなかった。若い女性教師に恋心を抱くことがあるが、それよりもまだ艶かしい。それは高校生が教育実習生に抱くオナペットのような存在だったかもしれない。母親がいくら綺麗でも母親以外の何者でもない。

　美佐江は自宅に殆ど知人を連れてきたことがなかったが、新宿のデパートで店の女の子と鉢合わせしたことがある。店の女の子は綺麗で艶かしいが、優輝が興味を持つ対象にはなりえなかった。美佐江はどうも知人に息子を見られるのが嫌だったのではないか。それはおそらく優輝自身の出生に秘密があるに違いない。クラスメイトのいうように、お母さんは淫乱な女性なのだ。だから僕みたいな変った子供が生まれたのだ。

　優輝は美佐江が仕事のときつけていく、甘ったるい匂いのする香水が嫌いだった。お母さんはいつもいい匂いなのに、何であんな匂いのものをわざわざつけていくのか理解できない。たぶん大人の男の人はああいう匂いが好きなのだ。優輝が好きな明日香は石鹸の匂いしかしない。優輝はこの匂いが大好きだった。

　明日香が優輝のところへ来て一年経った頃、優輝はマスターベーションを覚えた。パソコンのアダルトサイトを見ているうちに、ペニスが勃起しそれを手で弄っていると、ペニスから突然白いものが飛び出した。それはこのうえもなく気持ちのいい出来事だった。美佐江がいなくなるとそればかりしていた。三回続けてやったらペニスが痛くなった。

　アダルトサイトでは本当にセックスしている。それを見ているうちに自分でもそれをしてみたくなった。明日香が優輝のところへ来るときは、胸の開いた色っぽい服は着てこない。家庭教師派遣会社の方から、青少年を刺激する服装は避けるようにといわれているのかもしれない。それでも優輝は明日香の胸の膨らみや、スカートの下を想像しただけで勃起した。

九

明日香は今まであのような綺麗な顔の少年を見たことがなかった。子供の頃遊んだ人形の目鼻立ちのように整っていた。母親の説明では学校でいじめに遭い、登校拒否になったということだ。私はいじめる者の気持ちは理解できないものの、あのような少年がクラスにいれば、当然周りにいる者たちは白血球のように、体内に入ってきた異物や細菌を分解する如く、何かしらの行動を取ったとしても不思議ではない。

優輝はちょうど少年が成長する過程にあったのではないか。最初この家に家庭教師として派遣されたときと、現在の優輝が私を見る目とは明らかに違っていた。以前はどこから見ても子供だった。しかし今は私を女として見始めている。学校に通っていないため、優輝が接触する異性は母親と私しかいないから仕方ないかもしれないが、彼が私に好意を持ち始めたのは間違いない。しかしいくら私に好意を寄せようと、それを受け入れるわけにはいかなかった。私には信司がいるしそれに優輝はまだ中学生だ。

家庭教師を始めて優輝は二人目の生徒だった。前回の生徒は女子中学生だったため、ある意味気が楽だったが、優輝のように物覚えのいい子ではなかった。女の子の親からは家庭教師を頼んだにも拘わらず、あまり成績が上がらないと愚痴をこぼされた。しかし本人の学力が低いのだから、私がいくら努力しても無意味に思えて、自ら派遣会社に頼んで変更してもらったのが優輝だった。

優輝は非常に頭の回転が速く、英語は一年足らずで中学三年分を完全にマスターしてしまった。数学に関しても中学二年生の学力は確実にあるように見受けられる。教えるほうからすればこれほど飲み込みの早い生徒は有り難いが、優輝の親から感謝の言葉を掛けてもらうことはなかった。優輝に他の教科はどうしているのかと訊ねると、理科と社会はパソコンのソフトで勉強し、国語はひたすら本を読んで漢字を覚えるということだった。優輝がもし登校拒否にならず学校に通い続けていたなら、おそらく成績はトップクラスになっていたのではないかと思えるほど学力が高かった。これほど熱心に勉強するのは、私に褒めてもらいたいからなのかは分からないものの、優輝の私に対する視線が次第に強くなっていくのが正直怖かった。

優輝は顔で笑っても目は決して笑っていない。いつも蝋人形のような表情をしていた。私が女として優輝を受け入れられないのは、単に彼が中学生だからという理由だけではない。たとえ優輝が年上でも私は優輝とは絶対に付き合うことはないだろう。優輝には心がないのだ。感情がないといったほうがいいかもしれない。サイボーグのように人間らしさがみられないのだ。おそらくそれは優輝が育った環境によるのだろう。非常に人間的な信司とは正反対の性格だった。そんな優輝だが何度か男の子らしい姿を目にしたことがある。優輝の肩に手を置きながら数学を教えているとき、何気なく優輝の下腹部に目をやると、股間が膨らみ綿パンに小さなシミがついていた。それを目にしたとき私の不安はますます増幅していくのだった。それでも優輝は私に対して何か行動を起こすわけでもなく、ただ私の教えを素直に受けているだけだった。幸いにして優輝は私に電話番号もメールアドレスも訊いてこなかった。優輝には申し訳ないが、家庭教師派遣会社にまた変更してもらわなければならないだろう。

十

僕は今日まで生きてきて何も楽しいことがなかった。マンガを見ているときやゲームをやっているときはそれなりに楽しいが、終わった後は余計寂しさが増す。友達の家に遊びに行ったこともなければ、友達が優輝の家に遊びに来たこともない。そもそも友達といえる者がいなかった。別に友達を欲しいとは思わなかったが、ゲームの対戦相手は欲しいと思った。今学校に行かなくなってしまった優輝にとって唯一の話し相手は、美佐江と家庭教師の明日香だけである。そんなつまらない今だけど僕は大人になりたくない。お金を稼ぐには人と関わらなければならないし、変な気を使わなければならないから、かえって今のほうが気が楽なような気さえする。今は明日香が来るのが唯一の楽しみだった。

お母さんは本当に僕のことを好きなのかとふと思うことがある。幼い頃から絵本を買ってきても、それを読んでくれたことはなかった。家にいてもテレビばかり観ていて、僕とは殆ど口を利かない。お母さんは母親というよりも女なのだろう。中学に入ってクラスメイトから「お前の母ちゃん男に身体を売ってお金を稼いでいるんだろう」とよくからかわれたが、確かにお母さんの仕事は男がいなければ成り立たないということは、中学生の僕でも分かる。お母さんが女である以上お店に来るお客さんと、男と女の関係になることもあるかもしれない。僕は最近松本清張の小説に嵌まっているため、男と女の微妙な関係はだいたい想像がついた。男がお母さんの店に来るのは、店の女の子とエッチをしたいからなのだ。それを店の女の子たちはうまく利用して、店にお金を落としてもらう。それを店の女の子たちは給料として貰う。僕は大人になりたくなかったが、そのような男と女のゲームはしてみたいと思った。

他人からみればお母さんは魅力的な女性なのだろう。その意味では僕をここまで育ててくれたことには、感謝しなければならないのかもしれない。お母さんの身体はアダルトサイトに出てくる女の人の身体つきとさほど変らないものの、やはり自分を生んでくれた母親である以上、当然美佐江に対してまったく性欲が湧かなかった。

そんなある日明日香は突然来なくなってしまった。唯一の僕の楽しみがなくなってしまったのだ。こんなにショックなことが他にあるだろうか。明日香の代わりに来た家庭教師はさえない男子学生だった。国立大学に通っているだけあって、教え方は明日香より寧ろ上手だったかもしれない。でも僕は明日香に褒められたいから一生懸命勉強したのだ。こんな優男に褒められても嬉しくもなんともない。何で明日香は突然来なくなってしまったのだろう。明日香のことが気になり男子学生に訊いたら、明日香は暫らくアメリカに留学するということだった。僕は明日香が留学する前に、何とかもう一度会えないかと思った。

明日香の住んでいるマンションを探るため、以前何度か後をつけたことがある。明日香の住んでいるところは、女性専用のマンションで優輝が住んでいるマンションと同じ西部新宿線沿いにあった。一回、二回と追跡に失敗し、三回目にしてようやく住んでいる場所を突き止めることができた。それは探偵ごっこをしているようで、感情が高揚してくるのが自分でも分かるほど興奮した。優輝のマンションも、明日香のマンションも、駅からさほど離れていない場所にある。このままではストーカになってしまう。いやそれでもかまわないと思えるほど、身も心も明日香に

傾倒していった。そのときの僕は相手の気持ちを考える心のゆとりがまったくなかった。言葉を交わせるのが美佐江と明日香しかいなかったのも、自分の暴走を止めることができなかった原因だろう。

　後になって分かったことだが、学校という場所は単に勉強を教えてくれるところではない。人と人とのコミュニケーションを覚えるところなのだ。集団の中で自分はどのように対処したらいいのか、人生哲学を学ぶ場所でもある。本だけ読んでいて知識として蓄積されても、実際に経験しなければ人との健全な関係は築けないだろうということを、そのときの僕には分かるはずもなかった。ただ性欲というものは恐ろしいほどエネルギッシュで、それを満たそうとすると常識では考えられない大胆な行動をとってしまう。アダルトサイトを見れば見るほど、女性への性的欲求が抑えられないのが、自分でもどうすることもできなくなっていた。

十一

信司は一週間以上も明日香と連絡が取れず苛々していた。彼女のマンションに電話をしても、携帯に電話をしても全然繋がらない。大学にも来ていなかった。実家にでも帰ったのかと思ったが、それなら携帯に繋がるはずだ。明日香に何かあったのか。明日香のマンションは女性専用のマンションなので、信司が直接尋ねて行くわけにもいかず痺れを切らし考えた末、吉沢に頼むことにした。あの占いの館以来吉沢とは会っていなかった。今は占いのトリックより明日香のことが気になって仕方なかった。信司は携帯で吉沢に電話した。
「はい。吉沢です」
「可世木です」
「あ～。可世木君」
「吉沢先輩。明日香ともう一週間も連絡が取れないんです」
「そうなの。実は私も彼女に用があり何度か電話をしてみたけど、全然繋がらないんで貴方たち二人で旅行にでも行ったのかと思っていたわ。私も気紛れでよく旅行するものだから」
それでも国内旅行であれば、携帯電話は繋がるはずである。
「明日香に何か遭ったのでは？」
信司の胸に何ともいえぬ不安が過った。
「多分大丈夫と思うけど、どこかに入院しているってことないわよね。それでも瀕死の重体でなければ連絡ぐらいは取れるわね」
「先輩申し訳ないのですが明日香のマンションに行って、管理人に頼んで部屋を見てきてもらえませんか。女性専用のマンションなので男は立ち入り禁止なんです」
「分かったわ。彼女のマンションの住所を教えてくれる」
明日香のマンションは下井草にある。いつもは明日香の方から連絡がくる。信司から明日香に電話することはあまりなかった。それは信司自身が明日香に惚れられているという自惚れもあったからに他ならない。しかし相手から何の連絡も取れないでいると、自惚れも不安に変わり、相手の存在が自分にとってどれだけ大切な存在か、あらためて認識することになった。

十二

　吉沢は自分でも少し気になることがあって、明日香に直接会うため彼女のマンションに足を運んだ。明日香が住んでいるマンションは、女子大生だけが入居できるセキュリィティーマンションでエントランスホールに入るには、暗証番号を登録した者だけしか入室できない造りになっており、部屋のドアもオートロックになっていた。女子大生といえども一週間程度留守にすることはさほど珍しいことではない。ここの管理人は六十五歳位の夫婦でビルの管理会社から雇われ、このマンション内に在住しているようだ。吉沢は管理人に自分の身分を明らかにするため、学生証を提示し理由を説明して、部屋を見せてくれるように頼んだ。
　管理人は最初渋っていたものの、吉沢の粘り強い説得に根負けして渋々了承してくれた。部屋に入る前、管理人室より直接各部屋に繋がる内線電話にて、明日香の部屋である６０８号室に電話を入れたが、いくら呼び鈴を鳴らしても誰も電話に出なかった。
「どうも誰もいないみたいです」
　管理人は明らかに困惑した顔をしていた。
「部屋の中を見せて下さい。学校にも来ていないし実家に電話しても帰っていないみたいなので、もしかしたら部屋で倒れているかもしれません」
　吉沢は明日香の家族に電話をしたわけでもなく、もし部屋の中で倒れているのであればこれほど時間が経っているということは、既に亡くなっている可能性が高い。信司に頼まれてから何か胸騒ぎがして、部屋を確認しなければならない衝動に駆られた。
「一応規則になっていますので、実家の御両親に確認を取ってからでないと、管理人の私でも勝手に部外者を部屋の中に入れるわけにはいかないのです」
　管理人はできれば面倒なことに関わりたくないというように迷惑そうな顔をした。
「分かりました。直ぐ家の方と連絡を取って下さい」
　管理人は明日香の名古屋の実家に電話すると、母親が出て明日香が実家には帰省していないことを確認した。
「お母さんの了解を得ましたので、一緒に部屋に来て下さい」
「分かりました」
　先ほどまであれだけ渋っていた管理人が、きっと母親に心配だから直ぐ見てきて下さいとでもいわれたのだろう。マスターキーは管理人室の壁に埋め込んである鍵の掛かる鍵箱に入っていた。それは各階ごとに分けられ、Ｂ５サイズの四角いアルミ合金の板にワンフロア十室分の鍵が括り付けてあり、管理人は六階のマスターキーを取ると、吉沢と二人で明日香の部屋に向かった。部屋に直接通じる呼び鈴は、このマンションのエントランスホール入り口にもあったが、各部屋の入り口ドア横にも備え付けてある。最初管理人は呼び鈴を押した。当然のことながら返事は返ってこない。一呼吸おきマスターキーを挿してオートロックのドアを開けると、中から果実が腐敗したような強烈な異臭が二人の鼻を衝いた。そのとき吉沢は、自分の考えていた最悪の事態が起こってしまったことを悟った。
「ん。何だこの変な臭いは、夏目さん」

　管理人は中に誰もいないはずなのに、中の住人に呼びかけていた。狭い玄関に一歩足を踏み入れ中を覗き込むと、ワンルームのキッチン奥にあるベッドに横たわっている、明日香を目の当たりにして、管理人は初めてことの重大さに気づいたようだ。

「大変です。夏目さんが・・・・・・・」

　しっかり確認していないにも拘らず、中にいる住人は既に死んでいるのだと確信した。管理人は後退りして吉沢の前まで戻ると、蒼ざめた顔をしブルブル震えている。

　吉沢は自分でも不思議なほど落ち着いていた。玄関で靴を脱ぐと明日香が横たわっていると思われるベッドまで赴いた。部屋一面に立ち込める異臭に圧倒され、ベッドに横になっている明日香の顔を直視することはできなかった。今の時点では殺されたのか、自殺なのか、病気で亡くなったのか、原因は定かでないが、最悪の事態を覚悟しなければならないであろう。

　管理人から連絡を受けた所轄の警察署は直ちに現場へ急行した。明日香の死因は何者かによる絞殺だった。首には手か何かで絞めたような鬱血の痕が残っていた。

　吉沢と管理人は死体の第一発見者ということで、供述書を取るため夕方まで警察署に残った。明日香が司法解剖される前に、どうしても両親に会わせなければならないと考え、警察に連絡した後管理人に明日香の実家に電話をさせた。

「困るんだよね。こういうことがあると本当に」

　管理人はいかにも迷惑という態度を露骨に示した。吉沢の耳にははっきり聞こえなかったが「こんなことされると、次の借り手がつかなくなるんだよな」というようなことを口にしていた。吉沢はこの管理人の態度に無性に腹が立ったが、この年を取った管理人に怒ってみたところで仕方ないと思い言葉を飲み込んだ。明日香の両親が練馬警察署に着いたのは、既に夜七時を回った後だった。

十三

信司が吉沢から連絡を貰ったのは、吉沢が明日香のマンションを訪ねたその日の夜だった。信司は明日香と違って携帯電話しか持っていなかったため、電話は携帯に直接掛かってきた。
「可世木君驚かないで聞いてよね。明日香は何者かに殺されたわ」
吉沢自身何て説明すればいいのか、電話口の向こう側で、声が少し震えているように感じた。
「先輩、明日香が殺されたってどういうことですか？」
自分の彼女が殺されたといきなりいわれても、それを素直に受け容れることなどできるはずもない。最初吉沢がふざけているのかとすら思えた。
「私も電話だけではうまく伝えることができないから、今から会えない。西武池袋線、練馬駅のマック前で待っているから君もそこに来て」
電話を切った後明日香の身に何が起きたのか、暫くの間認識することすらできなかった。足元に敷いてある青いカーペットが、湖の水面に薄く張った氷が破れ、足がずぶずぶと沈んでいくように、底なしのブラックホールに吸い込まれるような感覚に襲われた。誰でもいい、今は一人でいるのが不安で仕方ない。この孤独が自分自身を飲み込んでしまうような気がして、自分でも気がつかないうちにオートバイに跨っていた。オートバイのセルを回すとエンジンは心地良いサウンドを奏で、振動が尻の下から頭に伝わってくる。しかし今はその感覚に浸っている余裕はなかった。一分でも早く吉沢に会いたい。オートバイは低いエンジン音を響かせ闇夜に消えていった。
吉沢は練馬駅前のマック前で、一人ポツンと佇んでいた。信司は吉沢を見てもまだ頭の中が混乱していた。大切なものはいつも身近にあって、普段それが大切なものと気がつかないが、亡くしてみて初めてそれが大切であったと気づくのである。
アパートを出て吉沢に会うまでの間、明日香と過ごした楽しい日々が、走馬灯のように頭を過った。二ヶ月前夏休みも半ばに差し掛かった頃、信二の帰省先である実家のペンションに、明日香から突然電話が掛かってきた。
「もしもし信司。私明日香。ねえそっちに遊びに行っていい？」
明日香は二ヶ月ある夏休みの前半はアルバイトをして、後半は海外旅行に行くといっていたので、まさか長野の黒姫まで電話が掛かって来るとは思ってもみなかった。
「別に僕のほうはいいけど、アメリカには行かなかったのか？」
夏休みに入る前明日香は、アメリカへ旅行するといっていた。
「アメリカには行ったよ。だけど途中でトラブルがあって早めに帰国したの」
「トラブルって何があったんだい？」
「友達が食中りで、仕方ないので急遽日本に帰国したの。暇になっちゃったからそっちに行っていい？」
信司は夏休み、冬休み、春休みは家の手伝いのため実家に帰省していた。大学生なんて一年の半分近くが休みである。信司は東京では殆どアルバイトをしなかったが、それでも映画研究会の仲間から誘われ、何回か植木屋の日雇いに行ったことがある。この仕事はクレーンなど入りにく

い庭に庭石を運ぶ仕事で、石は非常に重く担ぎ棒で二人ないし四人で担いで運ぶ。担ぎ棒で担ぐにもコツがあり、ただ肩に担ぎ棒を乗せて担ごうとすると、棒が骨に当たって痛くてとても担げない。首の斜め後ろの筋肉の付いたところに棒を乗せ担ぐ。信司は最初それを知らず、いきなり鎖骨に棒を乗せ、一歩も前に進むことができなかった。

「兄さん肩で担いだらいかんで。首の後ろで担がんと」

　歳のいった職人が親切に教えてくれた。その職人は信司より十センチ以上も背が低いにも拘らず、自分より遥かに重たい石を軽々と持ち上げた。その姿を見て信司は素直に感心した。この仕事は常にあるわけでなく、どうしても人が集まらないときだけ、映画研究会の先輩の携帯電話に掛かってくる。だから信司は東京では、この植木屋以外のアルバイトをしたことがなかった。

　今思い返してみるとなぜ明日香は、あのとき長野の自分のところまで来たのだろう。アメリカで友達と何かあったのか。そのときはあまり深く考えなかったが、今思うと自分に何か話したいことがあったのかもしれない。それも今となっては確かめることさえできなくなってしまった。

　信司にとって明日香は初めての女性ではなかったものの、これほど自分の気持ちが傾倒していったのは初めてだった。いなくなった今、その存在の大きさにあらためて思い知らされる。占いの館に行って見てもらったとき「貴方たちはまもなく破局を迎えます。そしてどちらかにとても不幸な出来事が起こるでしょう」といわれ、何て馬鹿なことをいっているんだろうと思ったが、このような形で明日香との関係に、終止符が打たれてしまうとは考えてもみなかった。結果的にあの女性占い師のいったとおりになった。あのとき明日香は占いのことを随分と気にしていたが、まさか自分自身が何者かに殺されるとは、夢にも思っていなかったに違いない。

　思い返してみると明日香との関係は、普通の大学生のカップルの関係とは何か少し違っていたような気がする。明日香とはキスをしたことはあっても、身体の関係まで発展しなかった。何度か明日香を抱こうと試みたが尽く拒絶された。最初自分のことが本当は好きでないのかもしれないとも思ったが、どうも話を聞いてみるとそうではないらしい。

「私はカトリック系の高校に通っていたため、どうしても付き合って一年も経たないうちに、そのような関係になることはできないの。信司のことは心から愛していることに偽りはないから、もう少し時間をちょうだい」

　そのようにいったため、自分も明日香のことが心底好きだったため、もう少し待ってみようと思った。

　高校時代同じクラスの女子と付き合ったことがあったが、そのときはあまりにも簡単に身体を許してくれたので、機会があればそればかりしていた。やがて彼女は「私との関係って結局身体だけが目的なんでしょう」といい信司から離れていった。今から考えれば新たに男ができたのかもしれない。それからの八ヶ月間卒業するまで彼女は、同じクラスのままだった。そのときこれが本当の針の筵だと思ったものだ。同級生に訊いても彼女がいる奴は皆エッチしているし、高校生にとって性欲は抑えられないものなのだ。

　信司が高校二年のとき、同じクラスの男子同士エロ話をしていると、最初にマスターベーションをしたのはいつかという話題になった。早いものだと小学生で既にマスターベーションを覚えた兵もいたが、殆どが中学に入ってからだった。このころマスターベーションを覚えるとそれこ

そ毎日やっていた。信司も中学二年のとき、風呂場でペニスに石鹸を付け手で弄繰り回しているうちに、突然ペニスの先端から白いものが飛び出した。そのときの気持ちよさは今でも忘れられない。初めて女性と関係を結んだときより、こちらの方がはるかに気持ちよかったような気がする。それはたぶん予期して出したのと、偶然たまたま出てしまったことも関係しているのではないだろうか。同級生四人でその話をしているとき、このクラスでは比較的真面目だと思われている坂口という男子が、信司たちのところに来て「せんずりってどうやってやるんだい？」と真顔で訊いてきた。それを聞いた信司と他の三人は顔を見合わせると一斉に笑い出した。
「お前本当にせんずりのやり方知らないのか？」
　信司の机に腰掛けていた竹内という男子が、からかい半分で訊いた。
「うん」
「そんなの簡単だよ。エッチなことを考えるか、エロ本を見てちんこを勃起させるだろ。そしたら金玉をゆっくりゆっくり揉むんだ」
　他の男子は今にも噴出しそうな顔をしていたが、坂口は真剣に竹内の話を聞いていた。翌日信司たちのところに来て「昨日せんずりをやってみたんだが、痛いし気持ち悪くなって途中で止めた」そのようにいう坂口は幾分元気がなかった。信司は坂口が本当に何も知らないのか変に思ったものの、そんな奴が自分のクラスにいることが信じられなかった。竹内はからかい半分で「坂口最初は皆痛くなったり気持ち悪くなったりするけれど、その後にとても気持ちよくなって精子が出るんだ」というと信司も「俺だって最初気持ち悪くなって三日後にやっと精子が出たんだぞ。女だって最初痛がるだろ」と追い討ちをかけた。松下という男子が「ぷっ」と噴出したので、竹内が松下の頭を漫才師の相方を叩くように叩いた。
　それから三日後再び坂口は信司たちの前まで来て「あれから毎晩君たちにいわれたようにやったけど、もう痛くて我慢できないよ。僕の身体がおかしいのかな？」坂口は泣きそうな顔だった。それを聞いた松下は耐え切れず大声で笑い出した。それにつられて他の三人も一緒になって笑った。竹内は腹を抱えて笑っていた。他の生徒たちが何ごとかと思い信司たちの輪に集まってきた。
「どうしたんだよ？何がそんなに面白いんだ。俺にも教えろよ」
「だって坂口の奴せんずりの仕方が分からないから、教えてくれっていうから教えてやったのさ。金玉を揉めば気持ちよくなり精子が出るっていったら、本気にして三日間やったら痛くて気持ち悪くなったってさ」
　それを聞いた男子生徒がほぼ全員爆笑した。女子にも笑っている者がいた。それと同時に坂口は教室を飛び出して行った。その後信司たち四人は担任に呼ばれた。担任の宮垣は物理化学を受け持っていて、実験室の横に物理化学を担当している教師だけが使用する研究準備室があり、信司たちは一人一人そこに呼び出された。最初竹内が呼ばれ、十五分後に信司が呼ばれた。この学校には生徒を叩く厳しい教師もいたが、宮垣はどちらかというと温厚な性格だった。しかし研究室に入っていくと、白衣を着た宮垣は明らかに不愉快そうな顔をしていた。
「加世木そこに座れ」
　宮垣の席の後にパイプ椅子が置いてあり、信司はおそるおそるそこに腰掛けた。
「加世木、俺が何をいいたいか分かるか？」

宮垣は信司の目を直視するとそのように訊いてきた。
「からかい半分で友達を傷つけるなということですか？」
信司は思ったことを素直に口にした。
「お前は分かっているようだな。先ほど同じことを竹内に訊いたら何を勘違いしたのか、竹内は常識で考えれば分かることを、坂口が勝手に解釈して勝手にやったことですといってきた。あいつは俺のいいたいことをまったく分かってないし、理解しょうともしない。竹内にお前がどう思うと理由はどうであれ、坂口はお前たちに不愉快な思いをさせられたのだから反省するのが筋だろう。そういうと竹内は何ていったと思う？」
「分かりません。竹内が何をいったのか分かりませんが、坂口が僕たちの言葉で傷ついたのなら、やはり僕たちが悪いのだと思います。ただ・・・・・・」
そこまでいって言葉を飲み込んだ。竹内の負けず嫌いの性格からして、宮垣に向かっていい訳めいたことをいったに違いない。宮垣は自分たちに反省して欲しかったのだから、この場は素直に頭を下げておけばまるく収まるのに、信司は咄嗟にそのように判断した。
「ただ何だ？」
「竹内もまさか本気で、坂口があのようなことをするとは、思わなかったのだと思います」
「竹内は坂口がそんな馬鹿な奴だと思わなかったといった。俺には盗人が自分の都合だけを考えて、そこに物があったから盗んでしまったと、いっていることと何ら変らないように思える。その後もぐたぐた言い訳めいたことをいっていたが、加世木こんなことをいちいち説明しなくても分かると思うが、坂口は勉強もできて本当に真面目な奴だ。クラスの者ともあまり話さないと本人もいっているように、本当に何も知らなかったんだと思う。その恥ずかしい気持ちを抑え、お前たちに恥をしのんで訊いたのだろう。そしたらお前たちはふざけて嘘を教えた。そして大声で笑い馬鹿にした。このときの坂口の気持ちが分かるか？あいつはお前たちを信用して相談したのに裏切られたのだ。あいつは泣きながら俺のところに来たんだぞ。俺はあいつのいうことをすべて訊いた。こういう問題は双方から訊かないと真実は分からないからな。だから竹内にも事情を細かく訊いたんだ。あいつは自分の都合のいいようにしかいわないところがある。竹内に限らず人は誰でも自分がかわいい。都合の悪いことは話したくないものだ。俺はお前たちを吊し上げるためにここに呼んだんじゃない。お前たちに坂口の気持ちを少しでも分かってほしかったんだ。あいつは俺のところへ来てくれたからまだ良かったけど、あれで坂口が屋上でも行って飛び降りてみろ、お前たちは一生後悔することになるのだぞ」
まさかそんなことで自ら命を絶つとは考えられなかったが、それでもその言葉を聞いたときハンマーで頭を殴られたような衝撃を受けた。竹内は理解しなかったかもしれないが、信司には宮垣が何をいいたいのかよく分かった。人は誰しも自分では気がつかないうちに人を傷つけてしまうことがある。自分では些細なことと思っても、その人にとってみれば物凄く深刻なこともある。打ち上げ花火のようにどこから見ても丸い形とは限らないのだ。坂口に対して悪気があっていったことではないものの、自分たちは確かにあのとき竹内たちと一緒になって笑っていた。それを見た坂口は遣り切れない思いだったのだろう。
「先生済みませんでした。後で坂口に謝っておきます。僕もあのようにからかわれたらやっぱ

りショックだと思います。それを先生に指摘されるまで気がつきませんでした」
　信司は宮垣に頭を下げた。おべっかを使った訳でなく本心からそう思った。
「どうやらお前は俺がいったことを理解してくれたようだな。自分の過ちを認めて相手に謝罪するということはとても勇気のいることだ。人間というのは大なり小なり間違いを犯す。自分でも気がつかないうちに相手を傷つけていることもある。そしてその間違いを指摘されたとき、どう対応するかがその人の真価が問われる。俺は警察じゃないから、分かろうとする奴には説明するが、はなっから聞く耳を持たない者にはあえて説明はしない」
　竹内がどんな言い訳をしたのか分からないが、信司はそのとき素直に坂口に申し訳ないと思った。研究準備室を後にした信司は、直ぐに坂口を探し出し素直に謝った。坂口の本心は分からなかったが信司を許してくれた。そして恥ずかしながら宮垣が、せんずりの仕方を教えてくれたと打ち明けた。そのとき、今度宮垣の家に遊びに行こうと思ったが、結局卒業するまで宮垣の家には行かなかった。
　明日香は自分のことをあまり語らなかった。自分が相手を好きなのだから、相手も当然自分のことを好きなものだと思っていた。最初付き合いだした頃、明日香の方が自分に惚れていたのは間違いない。しかし今こうして思い返してみると、明日香は本当に自分が明日香を愛したほど自分のことを愛してくれていたのか、それさえも自信がなくなってきた。人という生き物は実体のないものを信用できないものである。男と女もセックスして初めてお互いが分りあえる。夫婦も婚姻届をだして初めて成立する。その意味に於いて明日香と信司の関係は、単なる友達でしかないのではないか。
　同じサークルの中には吉沢を含め、明日香と信司は既に肉体関係にあると思っている者が殆どであろう。しかし実情は、キスは早かったもののそれより先は、ガードが固くて明日香は身体を許してくれなかった。信司は何かの話の中で冗談交じりに「明日香って処女？」と訊いたことがある。それに対して明日香は怒るように答えた。「当たり前でしょ。信司にさせないのに何で他の人に身体を許すと思うの」そのようにいわれたが、なぜか信司はそれを素直に信じることができなかった。もしかしたら明日香は中学か高校のとき、男に無理やり犯されたのではないだろうか。だからそれがトラウマになって、信司との肉体関係を拒否したのではないか、そう考えた途端明日香に対する欺瞞がどんどん膨らんでいった。
　信司は駅前のマックで吉沢を拾うとマックには入らず、直ぐ近くにあるファミリーレストランに入った。レストランに入るとウエイトレスの案内も無視して、人が一番少ないほうへ足を運んだ。アルバイトと思われるウエイトレスは、少々むっとしたような仕草で、信司たちに御冷やとおしぼりを出した。
「注文が決まりましたら、そちらのボタンを押して下さい」そういってメニューを置き厨房のほうへ戻って行こうとした。
「ちょっと待って、ホットコーヒー二つ」
　こちらを振り向いたウエイトレスに注文した。
「ホットコーヒー二つですね。他はよろしいですか？」
「はい」
　ウエイトレスは注文を確認すると、信司たちのテーブルから離れて行った。いつもと変わらない

ウエイトレスの態度にさえ腹が立った。自分の愛した人はもうこの世にはいない。周りは何も変わっていないのに、自分の心にポッカリ大きな穴が開いてしまったようだ。
「勝手に注文しちゃったけど、コーヒーでよかったですか？」
　信司は吉沢がおそらくコーヒーを注文するということは分かっていたことと、早く明日香のことを確かめたくて気が焦っていた。
「可世木君、本当に何ていったらいいか・・・・・・」
　そこまでいうと吉沢は言葉に詰まってしまい、この後信司に何て声を掛けたらいいのか迷っているようだった。
「先輩何でこんなことに。明日香が何で殺されなければならなかったんですか？明日香は人に恨まれていたのですか？」
　信司の口調はとても早口になっていた。

十四

明日香が殺害され吉沢から連絡をもらい、ファミリーレストランで会った夜、殆ど会話が無いまま時間だけがいたずらに過ぎていった。何を吉沢と話したらいいのか分からなかったし、吉沢もどのように信司を慰めたらいいのか手を拱いているようだった。ただ今は独りになるのが怖かった。誰でもいいから側にいてほしい。二十一年の人生の中で今日が最悪の日に違いない。朝になり始発の電車が動き出したため、吉沢を駅まで送りアパートに帰宅した。

「加世木君大丈夫？また電話ちょうだいね」

別れ際で示した吉沢の優しさが胸に沁みた。アパートに着き床に入ってもなかなか眠れなかった。明日香と付き合いだして一年ちょっと、身体の関係こそなかったが、それはそれで楽しいことも沢山あった。北海道に旅行したとき、信司がスキーで瘤をジャンプしている姿を見て驚愕している姿は、最も印象深く記憶に残っている。そのときは信司も普段より格好をつけて滑った。今ではそれも単なる想い出の一つとなってしまった。明日香との出来事を思い出しているうちに眠りに落ちていった。

目が覚めたときは既に昼を回っていた。遅い昼食を取るため布団から起き上がると、財布と携帯を持ってアパートを出た。携帯を見ると吉沢からメールが届いていた。（今日、午後からまた警察に呼び出され供述書を取るみたいで、今日は会えないけど明日また会って話したいことがあるからメールちょうだい）と綴ってあった。吉沢の気遣いが今の信司には有難かった。吉沢も遺体の第一発見者ということで色々大変だろうに。そんな中で自分を気遣ってくれて、どんなに救われたか本当に感謝している。女性としてはあまり意識していなかったが、女としての魅力は兎も角として、人としてはとても魅力的な女性だった。明日香が亡くなってまだそれほど日にちが経っていないにも拘らず、もう既に吉沢とのエッチを想像していた。男であるはずの自分を吉沢に優しく抱きしめてほしかった。それは死者に対する冒瀆なのだろうか。信司はアパート近くの中華料理屋でラーメンを食べると、レンタルビデオショップでアダルトビデオを借り、アパートに帰ってマスターベーションをした。射精後の喪失感は想像以上に大きかった。天国で明日香が自分を見下してどう思っただろう。自分はいったい何を考えているのか。明日の午前中、吉沢の家の近くにあるファミリーレストランで会おうとメールをすると、吉沢から直ぐに電話があった。このときほど人という生き物は、人という字の如く本当に支えが必要だと感じたことはない。そのときは明日香の死んだことと、殺人事件がどうしても結びつかなかった。

吉沢に会うその日の朝、何気なくテレビを点けると、朝のワイドショーで明日香のことが報道されていた。画像の中にマンションの管理人という歳の取った男が、しきりにレポーターに向かい話している。信司は見たい気持ちもあったが、煮え湯でも飲まされたような気持ちになりテレビを消した。ヘルメットを取ると部屋を出た。九時を少し回った頃ファミリーレストランに着いた。席に着くと早速吉沢に電話した。

「加世木君、早かったわね」

「はい。バイクを飛ばしてきました」

「分かった。今から行くから、三十分ほどそこで待っていて」

　吉沢の家からだと十分と掛からないと思ったが、洗面とか着替えをしていたらそのくらい時間が掛かるのかもしれない。信司はフリードリンクを注文し、ホットコーヒーとアイスミルクティーを交互に飲んでいた。暇つぶしに携帯のゲームで遊んでいると、吉沢がいつの間にか目の前に立っていた。
「ゲームに夢中になれれば大丈夫よ」
「吉沢先輩、何かをしていないと不安で仕方ないんです」
　そういうとなぜか目頭が熱くなってきた。何とか吉沢に気づかれないように努力したが無駄だった。
「加世木君辛いのはよく分かるわ。何ていったらいいか・・・・・・」
　吉沢には次の言葉が出てこなかった。
「吉沢先輩こんなときこんなことというと変に思うかもしれませんが、僕明日香のこと何も知らないんです。明日香は僕の実家にも来たことがあるし、自分のことをさらけ出し色々なことを話したんですが、明日香は自分のこと何も話してくれなかったんです。明日香は僕に惚れているとばかり思い込んでいたんですが、何か別に男がいたのかもしれません」
　信司は自分自身思ってもみなかったことを口にしていた。口に出して初めてどこかで明日香には、他に男がいるのではないかと、猜疑心を持っていた自分に改めて気がついた。
「何で明日香に他にも男がいたと思うわけ？」
「吉沢先輩は彼氏と、どのくらい付き合ってからエッチしました？」
　信司は明日香と肉体関係がないことを打ち明けようと思った。
「何藪から棒に。そんなこといきなり女性に訊くもんじゃないわよ」
「吉沢先輩。僕たち一度もそういう関係になったことがないんです」
「あらそうなの？」
　吉沢は別に驚くわけでもなくさらりと受け流した。
「一年以上も付き合って何もないなんて変じゃありませんか？吉沢先輩も以前一日中エッチばかりしていてもいいと、いっていたじゃないですか」
　信司は吉沢の思わぬ反応に、どうしたらいいのか分からなかった。
「男と女が付き合ったから、絶対セックスをしなければいけないという道理はないわ。貴方たちがセックスをしなくても別に不思議ではないし、そんなカップルは五万といるはずよ。何で今更そんなことをいうの？」
「吉沢先輩僕も男です。男というのは彼女ができたらエッチをしたいものなんです。それをさせてもらえない辛さは蛇の生殺しみたいなものなんです。明日香に一度アタックしたんですけど拒否されました。僕は精神科医じゃないので分からないんですが、何かトラウマのようなものがあるのかと思ったりもしました。しかしそれより他に彼氏がいたと考えれば納得できることが間々あるのです。男は女性の温もりが欲しいんです。何か大事なところで繋がっていないような気がして」
　信司は知らないうちに涙を流していた。
「加世木君それは男の勝手な考えよ。女は身体を許していなくても好きな人は好きなの。セック

スをしたから女は、自分のものになったと考えるのは男の勝手な思い込みよ。貴方たちは羨ましいくらい良いカップルに見えたけど」
　吉沢は男気なところがあったので、信司は自分の気持ちを理解してくれるものとばかり思っていた。
「明日香は男に殺されたんじゃないんですか？」
　信司のその言葉に一瞬吉沢は怪訝な顔をした。
「それどういう意味？明日香の付き合っていた男に殺されたということ。殺人をするからにはそれなりの力がいるから、犯人は男の方が確率が高いとは思うけど」
　信司がいった男とは勿論明日香の男という意味だったが。
「待っていたんです。明日香が僕を受け入れてくれるのを。僕だって童貞じゃありません。やっぱり何か変だったんです。僕たち」
　付き合っているときはそう感じなかったが、こうして明日香が亡くなり思い返してみると、何か変に思えることも少なくない。その後明日香との想い出を一つ一つ吉沢に聞いてもらった。しかし吉沢は「私は別に不思議だとは思わないけど」と繰り返しいった。このとき信司は忘れていたわけではないものの、占いのトリックを吉沢に訊かなかった。あれほど気になっていたことなのに、今はそんなことはどうでもいいことにさえ思えた。吉沢とこんなに話したのは初めてというぐらい、その後色々な話をしているうちに、気がついたら店内はランチの御客で一杯になっていた。吉沢は午後から就職のことで、都内に行かなければならないといったため、明日もう一度会う約束をして別れた。

馬乗りになっていた男が立っていた男たちに催促すると、男たちはそれぞれユニホームと下着を脱ぎ捨て裸になった。汗臭い饐えた臭いが更衣室に充満した。馬乗りになっていた男がどくと、先に裸になったこの中で一番体格のいい男が覆い被さり、いきなり自分のものを洋子の陰部に挿入してきた。
「痛い」
洋子の悲鳴は更衣室に響き渡ったが、それでも男は自分の行為を止めようとしなかった。男が腰を動かす度に痛さと恥ずかしさで涙がボロボロ出てくる。男は洋子が泣いているのもかまわず腰を動かし続けた。犬のような荒い息が鼻をついて、どうにも我慢ならなかった。
「お願いだから止めて」
洋子の叫びも虚しく響いているだけで、男たちの耳には音として届いても、言葉としては受け入れてもらえなかった。一人一人の行為は三分に満たない短いものだったが、その行為がことのほか長く感じたのは恐怖と苦痛のせいだろう。最後の男が射精すると男たちは脱ぎ捨てた下着とユニホームを身に着けた。
「このことは誰にもいうなよ。いったら自分が恥ずかしい思いをするだけだぞ」
脅しを掛けると男たちは逃げるように更衣室から出て行った。洋子は精神的ショックもあり暫くの間身動きができなかった。男たちが残していった体液の生臭い臭いが、自分の身体に浸透してくるような気がして、その汚らしさを一刻も早く払拭したかった。
「わー死にたい」
洋子はその場に起き上がると、裸のまま悲鳴とも、鳴き声ともとれる大きな声で叫んでいた。悔しくて悲しくて惨めでどうしようもなかった。

十六

洋子の父は娘が強姦された事実を知ると、学校には一切報告せず、知り合いの弁護士に相談し直ぐ警察に届け出た。弁護士の助言と洋子の家自体が経済的に恵まれていたこともあり、加害者からの示談金は一切受け取らず、家裁の裁判官に厳重な処分を望むと訴えた。

洋子を犯した三人の男たちは、警察に逮捕され鑑別所に収監されると少年院送致になった。御陰で洋子を犯した男たちとは顔を合わせることもなく、学校側にも被害者である洋子のことも知られず、無事卒業することができた。もし洋子の父が最初に相手の家や学校に怒鳴り込んでいったなら、こんなにスムーズにことは運ばなかったかもしれない。そのうえ皆から好奇な目で見られ、洋子の心の傷は益々深くなったに違いない。

野球部の三人は少年院送致となったものの、学校側は洋子の父の働きにより、被害者を特定することができなかった。人の口に戸は立てられないもので、たとえ学校の先生といえども、秘密を守ってくれるという保障はどこにもない。

強姦はその行為事態が辛いのは勿論だが、その後の周囲の対応が最も難しい。中学生のように性に対する興味が非常に強い者たちにとって、洋子の事件は格好の材料になってしまう。その意味に於いて洋子の父のとった行動は間違っていなかった。しかしその後洋子はスプリンターとしての夢を捨て、部を退部した。退部理由を母親は担任に、最近どうも体調が優れずスポーツはできないと説明した。陸上部の顧問は大会も控えていたこともあり、何とか説得に試みたが、洋子はスポーツ選手としては既に戦意が消失していて、顧問のいうことに耳を貸さなかった。

元々活発ではなかった洋子だが、あの事件以来他の者とは、殆どコミュニケーションを取ろうとしなかった。

高校進学は迷わず男子がいない女子高を選択した。高校では吹奏楽部に入部した。幼少の頃からピアノとフルートを習っていたので、スポーツとは違い単純に楽しむことができた。

洋子は元来男性が好きではなかったが、中学校の一件もあり、男という存在が自分には不必要に思えた。

私の中には、あの男たちに強姦される前から、異性に対する嫌悪感が存在していた。それに最初気づいたのは小学校の入学式だったと思う。その日父は玄関に私と母を立たせ写真を撮った。その後母が父の下に赴きカメラを受け取った。

「お父さん、今度は私が撮るから洋子の横に並んで」

母は父と同じ位置で写真を一枚撮った。そのとき横にいる父の手が私の目に入った。父の手は西洋人のように白く、手の甲は黒々した毛が生えていた。一見すると彫りが深く日本人には見えない。父は毛深く胸毛も生えていた。父とは何度か一緒に風呂に入ったこともあったが、そのときはそれほど感じなかったものの、今横にいる男の背広の袖から出た、毛むくじゃらの手が何か凄く不潔なものに感じた。父が嫌いだったわけではない。むしろ尊敬する部分の方が大きい。私の中にある嫌悪感が芽生えたのは、このときが初めてだったかもしれない。その後小学校で隣席の男の子の耳穴に溜まった垢が、男という存在を益々不潔なものに仕立てていった。隣の男の子だけでなく、周りの男の子にも給食の食べ方が汚かったり、意味もなく股間をさらけだしたりし

ているのを目にすると、尚のこと男子が嫌いになった。それでも普通の女性であれば初潮を迎える頃には、異性を意識しだすものだが、中学校に入学し誰それが好きとか、何君が格好いいとか女生徒同士噂をする。格好いい男子がバスケ部にいれば、そっと覗きにいったりしている女子を見ていると、何で自分は異性に対して心がときめかないのか不思議に思えた。少女マンガを読んでいると、ごく稀に同性愛者のシーンが描かれている。友達などに感動したねというと、何でという奇異な目で見られたため、やはり私は普通とは違う感覚を持っているのだと思い、それからは努めて自分が同性愛だと悟られないようにした。

十七

中学校のときに受けた強姦は月日が経過しても、素肌に彫られた刺青のように決して消えるものではなかった。どうしてもあのおぞましい男子生徒の息づかいと汗臭さが、頭から拭い去ることができない。洋子はそのトラウマを払拭するために、あらゆる分野の本を読破した。その中で特に興味を引かれたのが、霊界のことが書かれた書物だった。霊界の本を読んでいるうちに、なぜか人には自分ではどうすることもできない、運命というものが存在すると感じた。人は誰でもある法則に則って生きている。私があのような事故に遭遇したのも、運命なのではないかと思うようになった。それならば予めそれらを予測できないものか、そのように色々考えを巡らせていると、次に目が向いたのは占いだった。東洋西洋問わずあらゆる分野の占い本を読み勉強した。私が同性しか愛せないことも、占いの本を読むとそれなりの理由が書かれてあった。それは洋子の都合のいいように解釈したにすぎないのだが、それでも構わなかった。

明日香との関係も男女の関係と一緒で、最初の殻を破ってしまえば後は、坂を転げ落ちるように快楽の世界に入っていく。女しかいないこの女子高は同性愛者でなくても、同性に憧れを抱くことも決して珍しいことではない。しかし女の花園を一度出てしまえば、憧れや恋心が男性に変わっていくのが自然の流れである。洋子も今日までプレゼントや手紙を何通と貰い受けたが、それがはたして本心から出ているものなのか、確信が持てず彼女たちに対して、はっきりした態度を示さなかった。そんな中にあって明日香は、この高校に入って初めて自分の方から恋心を抱いた女性である。小学校のときも、中学校のときも、好きになった女の子がいなかったわけではないが、そのことを告白することは、当時の洋子にできるはずもなかった。中学三年生になって色々な本を読んでいるうちに、同性愛者は自分だけでなく、同じ悩みを持つ人は何人もいることを知った。明日香が本当に同性愛者かは分からないが、あんなにも簡単に私に身体を許してくれるとは思ってもみなかった。女が女の身体を求めるとき、どのようなシチュエーションがいいのか見当がつかず、色々な少女マンガを読んで研究したが、結局分からずじまいに終った。明日香が洋子の要求に対して拒絶すればそれで諦めがつくし、その後学校で変な噂が流れても、今の洋子にはそれを乗り越える強い精神力が備わっていた。ただ同性愛は公にできない後ろめたさがあったのも事実だった。女子高にはどうやら洋子以外にも何人かレズがいるという噂があるが、洋子がその噂の中に入っているのかは、今の洋子には知る術がない。ただどうしても家族にだけは知られたくなかった。そんなこともあり洋子は、東京の大学に進学することに決めた。勿論一年後、明日香が上京することの約束を取り付けることを忘れなかった。

十八

信司が映画研究会に入部したとき、吉沢にも他の国立大学に彼がいた。その彼、雅彦とは旅行先のアメリカで知り合った。旅先の開放感もあって直ぐに身体を許した。それは吉沢にとって初めての経験だった。苦痛を伴ったのは最初だけで、後はそれほど苦痛を感じなかった。

日本に帰国しても雅彦とは頻繁に会い情事を重ねた。雅彦は目鼻立ちも整い格好良かったが、性格は決してお世辞にも良いとはいえなかった。吉沢にも兄がいたが、女性に対してどのような態度を取るのか、吉沢の知るところではない。だから雅彦が多少自分に優しくなくても、男というのはそうゆうものだと解釈していた。多少邪険な扱いをされても許すことができた。

或る日、ホテルに入り先に雅彦がシャワーを浴びているとき、雅彦の携帯電話が突然鳴りだしたため、何気なく彼の携帯を手に取り覗き見てしまった。そこには自分ではない違う女性からのメールが着信されていた。内容は今度のデートの約束だった。私は二股をかけられていたのだ。いやもしかしたら三股かもしれない。他人の携帯を勝手に盗み見ることは許される行為でないことは十分理解していたが、そのときは反射的に迷いもなく携帯を取ってしまった。その罪悪感よりも、二股をかけられていたことの方が許せなかった。携帯を見詰めていると、雅彦がいつの間にか浴室から出てきて、何も着けずにこちらを見ていた。

「お前人の携帯、何勝手に見ているんだよ」

私はこの男にとって単なるセックスフレンドにしか値しないのか。吉沢はソファから立ち上がると、持っていた携帯を力一杯床に叩きつけた。そしてショルダーバックを取ると、急いで部屋を飛び出した。それっきり雅彦とは会っていない。

十九

信司と別れた吉沢は、もう一度占いの館に行ってみようと思った。信司には午後から就職活動に行くといっていたが、本当の目的はあの占いの館の、女性占い師に会うためだった。信司には自分の考えが確証を得られないまでは、まだ推測を無闇に口にするべきでないと考えた。

西武新宿線で新井薬師前まで行き、少し歩くと目的の雑居ビルが見えてくる。店舗内に入り目的の占いの部屋のある二階に上がると、パンドラの箱を目指した。しかし黒塗りの重厚な扉には（都合により洋子先生は、暫くの間休ませてもらいます）と貼紙がしてあった。あの女性占い師は洋子というのか。今日私がここに来てあの女性占い師がここにいないということは、もう二度とここには戻らないような気がしてならない。僅か一ヶ月も経たない間の出来事が、遥か彼方の出来事のように感じた。

吉沢はだめもとで店側に洋子の連絡先を訊いたが、案の定教えてもらえなかった。自分の推測が当ってほしくないと思いつつ、おそらくそれが正しいのではないかと思えたとき、どうにもならない遣る瀬無さが吉沢を襲った。貴女たち二人にいったい何があったのか。

明日香の葬儀は名古屋で行なわれるということで、吉沢も信司も辞退した。というよりも吉沢が信司に出席しないように勧めたのだ。私はなぜ信司にそのようなことを強要したのか、いまだにはっきり説明できないでいる。私が止めるまでもなく、信司一人ではおそらく行かなかったであろうが、少し可哀相なことをしたと感じた。明日香が信司のことを好きだったのは間違いない。ただ信司自身がいうように、二人の関係は何か他とは違っていた。その何かが今ようやく分かったような気がする。

二十

　翌日、昨日と同じファミリーレストランで信司と待ち合わせをした。やはり信司が先に来て三十分遅れで吉沢が信司の前に座った。吉沢は信司に会う前に、今回の一連の出来事を自分の頭の中で整理してみた。どのように説明したらいいのか、信司はそうとうショックを受けるに違いない。
「加世木君、昨日私就職活動のため都内に行くといったけど、実はもう一度確かめたいことがあってあの占いの館に行ってみたの」
「え、本当ですか！何で占いの館に行ったんですか？」
　信司は気の毒なくらい単純な、あまりにも単純なからくりに、気がついていないようで可哀相だった。この期に及んでまだ迷っている自分がそこにいた。このようになってしまったからには、おそらく洋子という女性はもうこの世にはいないだろう。だから自分が黙っていれば、もしかしたら真相は分からずじまいになるかもしれない。これは私の単なる推測に過ぎないのだから。吉沢は目の前でストローの袋を弄んでいる信司の手を徐に摑んだ。
「加世木君落ち着いて聞いてね」
「どうしたんですか？」
　信司の手は吉沢の手を握り返してこなかった。手を引っ込めないまでも、どうしていいか困っている様子が手に取るように分かって余計辛くなった。
「加世木君、明日香にはやはり彼がいたみたい。そしておそらくその者に殺されたんだと思う」
「そんな・・・・・・」
　そのとき初めて信司は吉沢の手を握り返してきた。その冷たい手は微かに震えていた。どのように説明すれば分かってもらえるだろうか。かえって事務的に説明したほうが、ショックが少なかったかもしれない。
「御免なさいね。彼っていったけど本当は彼女だったの。明日香はあのパンドラの箱の女性占い師に殺されたんだと思う。その女性占い師ももう自殺しているかもしれない。落ち着いて聞いてね」
　そういっている吉沢の方が、かなり頭が混乱していた。こんなに大事な話をしているのに、なぜか信司が愛おしくなってきた。ひょっとして自分でも気がつかないうちに、信司に恋心を抱いたのだろうか。いや間違いなく私は信司のことが好きだった。それも入部したときから。むさくるしい男たちの多いこのサークルの中にあって、信司はとても可愛らしい男性だった。いや今の吉沢にとって外見なんてどうでもいいことだ。雅彦のあの性格に比べたら、信司は何て心の優しい子なのだろうと思う。同じ男性でこうも性格が違うのかと、改めて思い知らされた。よりによって最初好きになったのが、雅彦のような最低の男だったことに、信司の出現はよりショックを大きくした。こんなに優しい男に明日香の恥部を説明することが、本当にいいのか躊躇われた。
「明日香と女性占い師はレズだったの。女性占い師の名前は洋子というらしいんだけど」
　そのときの信司の気持ちを想像するだけで恐ろしかった。
「明日香がレズだったなんて！」

「明日香が本当にレズかどうかは、本人が亡くなってしまった今確認することはできないけど、彼女自身はバイセクシャルだったんじゃないかしら。男の人も受け入れられる体質だったと思うわ。加世木君あなたとの関係を大切にしたかったのね。洋子という女性に関係を清算しようとしたのじゃないかしら」

「その女性占い師に、別れ話を持ちかけたので殺されたのですか？」

「これはあくまで私の想像にしか過ぎないのだけれど、明日香と洋子はかなり以前から深い関係で、何も知らない明日香を、洋子がなかば強引にレズの世界に引き込んだ可能性があるわ。明日香も最初のうちは拒んでいたかもしれないけど、それを拒めなくなった何かが二人の仲にあったのね。二人の仲はまるで泥濘の世界にでも嵌り込んだように抜けられなくなってしまった。だけど明日香には心から好きな人ができた。加世木君貴方よ。貴方の出現で二人の関係は微妙にずれが生じ始めた。明日香は貴方を好きになったとき、自分が本当はレズではないことを悟ったのではないかしら。かといって普通の尻軽女みたいに貴方に、身体を許すことができず随分悩んだと思うわ」

　そこまでいうと吉沢は信司の顔をじっと見詰めた。今まで一後輩として君呼ばわりしていたが、信司に対する気持ちの変化に、自分自身気づかないうちに、一人の男性として意識し始めていた。

「吉沢先輩にそのようにいわれると、確かに自分以外の者、僕は男性とばかり思っていたのですが、本当は女性だったんですね。その意味では少し安心したような気さえします。明日香は僕とエッチしなかったのは、洋子という女性に義理立てしたんですね」

　信司のいうように明日香は洋子に義理立てしたのではないだろう。信司と関係したことにより、洋子との恥部が浮き出てしまうことを恐れたのではないか。吉沢には同性愛の気持ちは分からなかったが、結果として明日香は洋子に殺害されたことを考えると、明日香は洋子との関係をすべて清算し、信司との関係をより深めたいと考えたのではないだろうか。

「明日香は洋子との関係を断ち切りたかったのだと思うの。貴方たちが占いの館に行ったとき、すべて貴方のことは明日香が洋子に予めリークしていたと考えれば、過去のことがすべて当てられたことの真相が分かるはずよ」

「そういうことだったんですか。過去が分かるなんておかしいと思ったんですよ。そういわれると、トリックなんていえるもんじゃないですね」

　明日香が洋子のことを告白したとき、洋子が信司に会いたいとでもいったのか。明日香は洋子に信司を見せるために占いの館に連れて行った。洋子にしてみたら自分たちの関係に入り込んできた信司が憎かったに違いない。洋子が何を考えていたか吉沢の知るところではないが、このとき洋子は悪意を持ったとしても不思議ではない。

　すべての謎の解明は吉沢の推測にしか過ぎないものの、信司の前に掛かった霞が徐々に取り払われていくようだった。吉沢はこのことを明日香に直接確かめたかった。本人の口から訊けば問題も解決することができるし、明日香も命を落とさずに済んだかもしれない。私がもう少し行動を起こすのが早ければ、結果はこんな悲惨なことにならなかったのではないかと悔やまれた。私はあの女性占い師を見たとき、なぜか明日香と関係があることが分かった。目元しか見えないが

、女の私から見ても魅惑的で綺麗な女性に違いない。私にはそのような要因はないが、明日香があのような女性に惹かれていったのは、仕方ないかもしれないとさえ思えた。
「明日香って確か女子高だったわよね」
「はい。高校は厳格なカトリック系の女子高と聞いています。名古屋では結構有名らしいですよ」
「明日香と洋子という女性は、その高校の先輩と後輩だったんじゃないかしら。その高校で明日香は先輩に憧れを抱いた。それを洋子は恋心と受け止め明日香を取り込んだ。あるいは洋子の方が明日香に恋心を抱いたのかもしれない。どちらが先かは分からないが、いずれにしても二人の関係は高校時代に結ばれたのね。そしてその関係は明日香が殺されるまで続いた。でも明日香は過去と決別して、新しい自分を求めようとした。それを洋子は受け入れられなかったんだと思うわ。女が男に恋するのも女が女に恋するのもきっと同じだと思う。相手を好きになってしまったらもうどうしようもないもの。その人しか見えなくなっちゃうのね。後から考えれば他に幾らでも男はいる。相手が同性であれば、そう簡単に相手が見つかるとは限らないけど。そう考えると同性の場合、別れて直ぐ次というわけにはいかないかもしれないわね」
　吉沢は信司に説明しながら、何で明日香を殺してしまうまで追い詰められていったのか、それほど明日香を手放したくなかったのか、本人たちがいない今確認することはできないが、それだけ明日香に対する洋子の思いは、強かったのだと思うしか術がなかった。
　私たち女性が男性を好きになる要因と、男性が女性を好きになる要因は必ずしも一致しないまでも、先ずは容姿から入っていくのが普通である。しかし同性の場合はどうなのだろう。必ずしも容姿だけに囚われたわけではないだろうに。信司だって特別ずば抜けて格好いいわけではないだろうし、同じサークルの中にはもう少し容姿の整った者もいる。しかし私自身もそうであるように、単に顔だけでなく信司には何ともいえない優しさと、守ってあげたくなる弱さが兼ね備わっている。私は心の優しい明日香と同じく、心が優しい信司が結ばれればいいと思い、明日香に空気を入れ信司とくっつけようとした結果、そのとおりになってしまった。今から顧みると、それは明らかに自分の思惑とは相反することだったように感じる。雅彦とあのようなかたちで、別れなければならないと分かっていれば、私が信司の彼女になっていたのではないかと思うと悔やまれてならなかった。そうすれば明日香は死なずに済んだかもしれないのに。浅はかな御節介女の行動が、一人の心優しい女性の命を奪ってしまった。自分に正直に生きれば、こんなことにならなかったのではないか。
「吉沢先輩、それだけ洋子という女性は、明日香のことを愛していたということですよね。明日香は同性をも引き付ける魅力があったんです」
「あなたは洋子に対して、恨みとか憎しみとか持たないわけ？」
　信司のその間抜けな言葉に一瞬腹立たしささえ覚えた。
「僕は吉沢先輩の話を訊くまで、ある種の不安がどうしても頭から払拭できないでいたんです。あんないい子が他人から恨みを買って殺されたなんて信じられませんでした。明日香が殺されたのは、僕の他に男がいて、それが拗れて殺されたのではないかとしか考えられなかったんです。だから吉沢先輩の話を聞いて、胸のつかえが取れたような気がして、何かおかしいですか僕の考え？」

信司の顔は確かに迷いが吹っ切れた清々しい顔だった。しかし信司の考えは男に殺されたのならショックだが、同性に殺されたのなら諦めがつくというようなものだ。でも本当にそれで納得してしまっていいのだろうか。同性愛者には、同性愛者にしか分からない、もっとドロドロしたものがあるような気がしてならない。それは本人たちがいない以上もう知ることはできないだろう。彼女たちのことはおそらく信司にとっても、私にとっても、一生頭から払拭できないことに違いない。しかし亡くなってしまった者のことを、いつまで思い続けても何の問題の解決にもならないだろう。それは身勝手な考えだが、明日香の性格なら、残された信司には当然幸せになってもらいたいと願うはずだ。

信司の新しい彼女がたとえ吉沢であっても、明日香なら許してくれると思う。信司が吉沢のことをどう思っているか分からない。でも私は信司が好きなのだ。

「加世木君、この事件が解決するかどうかまだ分からないけど、今度お互い気持ちが落ち着いたら、近場でいいから旅行に行きましょう」

「本当ですか？」

信司を慰めるよりも、吉沢自信の虚無を何かで埋めたい気持ちが強かった。

二十一

洋子は高校のとき「赤石祥子の水晶占い術」という本に魅了された。占いはそれこそ百人いれば百通りの仕方があり、生年月日で占うものもあれば、その人の人相や手相、名前などさまざまな占い方法がある。生年月日や血液型などで占う場合は、どうしても統計学的な要素が強くなってしまう。同じ日に生まれた人が、必ずしも同じ運命を辿るかといえばそんなことはない。それらは過去の統計にそれぞれ当てはめていくことになる。

人相学や手相なども目の位置や鼻の形、手相でいえば線の長さやその場所、これらも過去の先任たちの作り上げたものを参考にすることになる。それはある意味に於いて、どんな人間であっても学習することで習得できるものである。

占いというと何かとても神秘的なもののように最初感じていたが、色々な書物を読んでいるうちに、落語や芸能のように、師匠から弟子に伝承されていく文化のようにも思えた。その中にあって何十冊、あるいはもっと沢山読んだかもしれない占いに関する書籍の中で、「明石祥子の水晶占い術」は他のどの書籍とも似た部分がなく、異質なものだった。本の内容はどう考えてもオカルト的なものに感じた。本の中に他の占いは努力すれば、誰もがそれを習得することができるが、この水晶占いだけはどんなに努力しようとも、その者にその素質がないかぎり、絶対に身につける事は不可能であると記されていた。水晶に像を浮かびださせるには霊的な特殊能力が要るらしい。もしこれに興味を持って実際にやってみたいと思うのであれば、本物の水晶はかなり高価なので、ガラス玉を買って試してみるといいと書いてあったため、洋子も眉唾ものと思いつつハンズに行き、水晶玉のようなガラス玉を購入した。

最初のうちは幾ら目を凝らして眺めてみても、自分の歪んだ顔が映るだけで、他には何も見えてこなかったが、二ヶ月ぐらい経った頃、突然ガラス玉に何やら像が浮かんできた。頭の中ではどこかで信じていたのだろう。いつか自分にも見えると。そう思いつつも実際にガラス玉に像が浮き出たことに洋子自信驚いた。

洋子はこの出版元に手紙を出したが、返事は来なかった。それでも諦めきれず何度も手紙を書いたが、結果は同じだった。自分でもいったい何通手紙を書いたのか分からないくらい手紙を書いた。洋子は明石祥子がどこに住んでいるか分からなかったものの、東京に出ることを決意した。東京には占いのスクールがあり、そのスクールに入校しようと思ったからだ。スクールは二部制になっていて、洋子は昼間大学に行き夜間このスクールに通った。しかしスクールには水晶占いのコースはなく、洋子は仕方なくタロット占いのコースを選択した。正確にいうと仕方なくというのは若干違っているかもしれない。このタロット占いの講師田原麻弥子は、水晶占いについても何冊か本を出している。この講師も水晶占いに関しては、教えてもらって覚えるものではないという考えで、表立って水晶占いを生徒に教えていなかった。

スクールに通い一年が過ぎた頃、洋子は田原に水晶占いのことを尋ねた。

「先生、私どうしても水晶占いがやってみたくて、教えていただけないでしょうか」

最初田原は怪訝な顔をしていたが、思い直したように「私は本を出しているけど、私自身は水晶占いをする力がないの」

それまで洋子は田原にプレゼントを贈り、それなりの下準備をしてきた。何とかして水晶占いを教えてもらおうと思い田原に取入った。しかし田原が、本は出しているが自分はそのような力はないと告白した。目の前が真っ暗になり、今までの努力がすべて水泡と消えていくのかと思えた。五十歳にも届きそうな太った中年女が、一気に憎らしくなってきた。しかし田原が口にした言葉は意外なものだった。

「私は駄目だけどいい人を紹介してあげるわ。明石先生。あなたも水晶占いに興味あるのなら知っているかもしれないわね」

あんなに手紙を出し続けても、一度として返事すら貰えなかったのに。しかし随分遠回りしたものの、やっと会えることができるかもしれないと考えると、先ほどまで憎らしかった中年女も愛おしくさえ思えた。明石は本名をタミといい七十歳近い老婆だった。それでも眼光は鋭く言葉もハッキリしていた。

「あんた、わしに何十通と手紙をくれた名古屋の娘だろ。わしが返事を出さなくてもあんたはここに来る運命だったのさ」

洋子は横浜にある明石の自宅に一年以上通い、明石の水晶占い術をすべて身につけた。

二十二

明日香のような純粋な娘が、東京の悪い環境に毒されていったのは、洋子にとっては大きな誤算だったかもしれない。私は水晶占い術を身につけたいと思い東京まで出てきた。結果として明石から占い術を伝授してもらうことができたが、その道に進みたかったとはいえ、東京を選んだことは奇跡に近い。その意味で明石まで辿り着き、尚且つ占い術を身につけることができたのは、運命の何ものでもないだろう。それは私に霊的な能力があるからに他ならない。人に見えないものが見えるということは、何とも気持ちのいいものだった。

東京へ出てきても明日香との関係は永遠に続くものと思われた。しかしここにきて「洋子さん私好きな人ができたんです」私を見て明日香は恥ずかしそうに告白した。その言葉が最初信じられなかった。

「明日香何いっているの」

明日香が私以外の者を好きになるなんて考えてもみなかった。

「実はもう付き合って一年になるんです。彼は同じ大学のサークル仲間なんです」

「もしかして明日香が好きになったのは男なの？知らなかった」

知らなかったといったのは、明日香が同性愛者でなかったからだ。洋子は自分が同性愛者だから、明日香も当然同性愛者だと思い込んでいた。しかし明日香は男も女も両方愛せるバイセクシャルだったのだ。

「御免なさい。でも彼とはまだセックスしていないの。できないの」

「何で。その男が好きなんでしょう。さっさとセックスすればいいじゃないの」

洋子はいつになく動揺しているのが自分でも分かった。そこには何か煮え切らないものがあった。

「洋子さんとの関係を終らせないかぎり、彼とは結ばれないと思います」

「私が邪魔になったっていうこと」

「違います。私本当は同性愛者ではありません。洋子さんのことは尊敬しています。でも彼と出会って洋子さんとの関係は、愛とは違うような気がしたんです」

洋子はその言葉を聞いたとき、心臓を鷲掴みされたような衝撃を受けた。私は心から明日香を愛していた。しかし明日香は私を愛していなかった。では、今日までの二人の関係っていったい何だったのか。私は明日香に無理強いしていただけなのか。私の一方的な思いであって、明日香は本当は男の人の方がよかったのだ。私も馬鹿ではない。それでも今も明日香を愛していることに変りはない。明日香に幸せになって欲しい。私はこの何年か明日香の御蔭で幸せだった。それは私の勘違いだったかもしれない。

そのときふっと思った。潔く身を引き明日香に幸せになってもらおうと。

「分かったわ。一度明日香が好きになった彼に会わせて。直接会うのも気が引けるから、私の占いの館に連れてきて、明日香には本当に感謝している。貴女が同性愛者でない以上貴女の幸せを奪う権利は私にはない。貴女が好きになったのだから、きっといい人に違いないわ。貴女との関係に終止符を打つ前に、一度だけその彼に会わせて」

「洋子さん・・・・・・」

　洋子を見詰めていたその瞳から涙が零れ、頬を伝わり明日香の握りしめた手の甲に落ちた。それを見た洋子も目頭が熱くなっていた。

しかし明日香が彼氏を洋子の占いの館に連れてきた後、洋子の兄の結婚もあり、暫く実家に帰省していたところ明日香に会えないまま、明日香はマンションの自室で何者かに殺害されてしまった。別れの言葉も交わさないうちに、明日香は永遠に手の届かないところに逝ってしまった。何でこんなことになってしまったのだろう。誰がいったい明日香を殺害したのだろうか。でも明日香が亡くなったのは私のせいなのかもしれない。この毒のような街に明日香を呼寄せたのは私なのだから。『明日香御免ね。本当に御免ね』明日香との別れがこんな結果になるなんて、一体誰が想像できただろう。私は本当に明日香に幸せになって欲しかったのに。

二十三

既に夢の中で明日香を何度も犯していた。それを現実に行えるかどうかは分からないものの、それほど難しい行為には思えなかった。その行為を戸外でやるのか、家の中でやるのか、現実問題として戸外でやるのは不可能に近い。だからといって明日香が今住んでいるマンションは女性専用のマンションなので、男の優輝が簡単に入れるとは考えられない。それより何よりもっと重大な問題は、現在明日香はまだ日本にいるかどうか分からないということだ。

家庭教師と生徒の関係であったため、明日香とはプライベートな話は何もしなかった。それでも留学するなら少しはそのようなことを口にすると思うのだが、そのことについては何も触れなかった。僕自身は恋焦がれていても、明日香にとってはただの生徒に過ぎなかったのだろう。現実にそうであってもそれを認めたくなかった。

日曜日の夜、明日香の住んでいるマンションに行ってみると、部屋の電灯は点いていた。本人がいるかどうかは確証がないものの、まだ明日香は日本にいるのは間違いないような気がした。決行は早いほうがいい。しかしどうやって中に入ればいいのか、その時点ではまだ見当もつかなかった。家に帰宅しても頭の中は明日香を犯すことだけで、勉強など手につくはずもない。このまま何もしないでいると頭がおかしくなってくる。

僕の人生で初めて立てる大きな計画だった。色々考えたすえに思いついた計画は、女装して明日香のマンションに忍び入ることだった。

明日香のマンションに入るには暗証番号が必要で、住人以外は入室禁止という貼紙がしてある。

美佐江が出勤した後、美佐江の部屋に入り鬘をつけ、口に紅を塗りアイシャドウを引いただけで、既に綺麗な女性に変身していた。腰回りは美佐江の方が太かったため、ワンピースを借りて着た。胸にタオルを二つ丸めて入れ女性の乳房を形作った。鏡を見るとそれなりに綺麗な女性になっていて自分でも驚いた。クローゼットから若い女性が持ってもおかしくないショルダーバックを一つ肩に掛けると、自分の携帯を持ち部屋を出た。女子大生専用マンションの入り口まで行ったが、セキュリティーが行き届いていたため中に入ることはできなかった。人目につかない場所でメールを打つ振りをして、帰宅する女子大生を待った。十分ほど待ったところで、エントランス前に一人の女性が現れた。優輝は急いでその女性の後に続いて中に入った。想像していたよりも簡単に中に入ることができた。ホールで一旦止まりメールを打っている振りをして、女性を先にエレベーターに乗せた。女性がエレベーターで昇った後、戻って来たエレベーターに一人で乗った。六階で降り左から三番目の部屋を目指した。６０８号室の部屋の前まで行くとインターホンを押した。「どちら様ですか」という声がしたので、裏声を使い「６０６号室の者ですけど預かり物がありますので持ってきました」といった。このマンションは小包がどのように扱われているか全然分からなかったが、美佐江がよく昼間同じフロアーの人の小包を預かっていたので、それと同じ行動をとった。そのときはセキュリティマンションだから、預かり物などないことに考えが及ばなかった。それでも中の住人は疑いもせずドアを開けてくれた。優輝も預かり物といったものの、手に持っているのは美佐江のショルダーバックだけだった。中の住人はおそらく覗き穴から見て、ドアの前にいるのが若い女性であると思えたため、ドアを開けたのだ

ろう。
　そこに立っていたのは明日香以外の何者でもなかった。何かすごく久しぶりに会ったような気がする。
「どうも済みません」といいこちらを見た表情が一瞬凍りついた。
「あれ、貴方もしかして優輝君？」
　いくら女装しても明日香には、すぐに優輝と見破られてしまった。
「どうしたの？そんな格好して」
　自分の教え子が女装してわざわざ会いに来たことを、不思議に思うのは当然のことだろう。
「先生は本当にアメリカへ留学するんですか？」
「え・・・・・・」
　明日香は一瞬言葉を詰まらせた。そのとき優輝は、留学はあの男子学生がついた嘘だと悟った。そしてそれは明日香が優輝を拒否したのだということも、何となく分かったような気がする。僕はこの目の前の女に嫌われたんだ。そう思った途端足がひとりでに前へ出ていた。
「優輝君いったいどうしたの？」
　落ち着いた態度とは裏腹に、明日香は後退っていった。
「優輝君こんなことをしてはいけないわ」
　家庭教師と生徒という関係が、男と女の関係になり、そして加害者と被害者の関係になっていく。多分悪いことをしているに違いない。しかしもうここまで来てしまった以上、僕の中にある導火線は、水を掛けようと、砂を掛けようと、もう消すことはできなくなっていた。
　もうこのとき明日香は優輝にとって、先生ではなくただの女にすぎなかった。ワンルームしかない部屋で、明日香は直ぐにベッドまで追詰められていった。ベッドに倒しブラウスの胸の合せ目に手を入れ手前に引くとボタンがはち切れ、白いブラジャーが目に飛び込んできた。肩紐をずり下げると、少し小ぶりだが形のいい乳房が露になった。
「お願いやめて・・・・・・」
　無視してスカートをめくり上げパンティーをずりおろした。明日香の身体は小刻みに震えている。優輝は馬乗りになり片手で明日香の手を押さえていたが、悲しそうな顔を向けるだけで何も抵抗しなかった。優輝は明日香に覆いかぶさりながら腰を浮かせ、ワンピースを脱ぎトランクスも器用に脱いだ。何も抵抗しない明日香の足を広げた。このシーンは何十回とアダルトサイトで見た場面だ。やっと本当のセックスができる。夢にまで見たこの瞬間をどれだけ待ち焦がれていたことか。僕は今最も愛した女性と結ばれようとしている。
　優輝は自分のペニスを持って女性器に挿入しようとした。しかしそこで問題が発生した。ペニスが勃起しないのだ。こんな大事なときになぜ勃起しないのか、いつもは想像しただけでペニスは硬くなるのに、今日に限ってペニスは何の反応も示さなかった。それでもそのまま入れようと試みたが、挿入できるわけもなく、ただいたずらに時間が過ぎていくだけだった。明日香は焦点の定まらない目で天井を見ていた。僕がこんな惨めな思いをしているのに笑いやがって。優輝には明日香が笑っているように見えた。しかし実際明日香は笑っていなかった。気持ちが焦れば焦るほどことがうまく運ばない。

「もうやめましょう」
　明日香の口から出た言葉は力のないものだったが、優輝の胸にはぐさりと突き刺さる嫌な言葉だった。
「なんだと・・・・・・」
　優輝は気が付くと明日香の細い首を両手で絞めていた。目の前の物体は何も抵抗しないまま動かなくなってしまった。下半身に冷たいものを感じ下腹部を見ると失禁していた。
「明日香先生。明日香先生・・・・・・」
　いくら呼びかけても目の前の物体は何も答えなかった。パソコンの中の出来事が現実なのか、今目の前に起きたことが現実なのか、僕にもよく分からない。ゲームでは人は直ぐ死ぬし、アダルトサイトで女の人は最初嫌がっているのに、最後は声をあげて喜んでいる。
　明日香が生きているとき、僕のペニスが勃起し行為をしたら、明日香も喜んでくれただろうか。今目の前にいる動かなくなった女の人は、本当に明日香なのか僕には分からなかった。
　優輝は人を殺めておきながらいたって冷静だった。明日香の遺体からブラウスとブラジャーを剥ぎ取ると、枕元にあったピンクのスウェットを着せてあげた。そしてパンティーを穿かせると、ベッドに静かに寝かせた。

二十四

吉沢が自分に対して好意を持っていてくれているとは思ってもみなかった。歳は一つ違うだけだが、吉沢は信司より遥かに大人だった。明日香のことは巻き込むかたちになってしまったが、吉沢自身それほど迷惑には感じてないように思えた。信司は吉沢に対して憧れのようなものを抱いていた。それは例えるなら高校時代、教育実習に来てくれた女子大生に憧れるような感じに似ている。想像の中ではその女性とデートをしたり、エッチしたりするのだが、現実はそんなことに絶対ならない。吉沢もそれと同じような憧れの対象だったのではないだろうか。

吉沢は美人といえなくもないが、女としてある種の不思議な魅力が備わっている。そのある種は口では旨く説明できない。強いて言えば小説に登場する女性に魅了されていくような感じかもしれない。明日香と比べても吉沢の方が随分と大人びていた。

信司は明日香と付き合っているときでも、吉沢を何度も頭の中で犯したことがある。服装にしても、髪型にしても、吉沢はどちらかといえばボーイッシュなタイプで、スカートを穿いている姿を殆ど見たことがなかった。

吉沢は髪の毛をロングにして化粧をすれば、それなりの美人になるだろう。そんなことよりも吉沢には母親の胎内にいる心地好さ、安心感がある。吉沢なら多少足を踏み外しても、許してもらえるような心の広い女性に思えた。ただそれは恋心とはちょっと違うような気もする。明日香という存在があったからこそ、吉沢に惹かれたのかもしれない。

吉沢のことは好きだったが、それは明日香に対する気持ちとは、明らかに異なるような気がしてならない。それでも吉沢が自分に好意を持っていてくれていることは、非常に嬉しいことには違いない。恋人が死に本来であればどん底状態のはずなのに、吉沢のその存在が信司の精神状態を平常に保ってくれた。

あのとき吉沢に「旅行に行こう」と誘われた。それは明らかに吉沢の自分に対する、好意のあらわれではないだろうか。それにも拘らず「はい」と答えたものの、どこか煮え切らない態度をとってしまった。あれから既に二週間以上経つが、犯人は一向に捕まらないし、吉沢からも何の連絡もない。だからといってこちらから連絡を取るのも躊躇われた。自分の心のどこかに迷いがあるのを、吉沢が敏感に感じ取ったのではないか。何で俺ってこんなに優柔不断なのだろう。自分で自分が情けなかった。

その日は朝起きると、頭が痛く身体もだるかったため学校を休むことにした。それでもテレビだけは点け布団に潜り込み、テレビの音だけを目的もなく聞いていた。ワイドショーやドラマの再放送が流れ、昼近くになった頃ワイドショーが始まった。そのとき半分うとうとしていた。テレビから（女子大生専用マンションで絞殺されました、夏目明日香さんを殺害したと思われる中学生、十三歳の少年を逮捕しました。という速報がたった今報道部に飛び込んできました。また詳しい情報が入りしだい御伝えします）と流れた。信司のまどろんだ頭の中が急に覚醒した。明日香を殺害した少年が捕まった。自分にもう一度いい聞かせ頭の中を整理しょうと試みた。テレビをもう一度真剣に見直したが、それ以上詳しいことはテレビからは伝わってこなかった。チャンネルを変えても一緒だった。

信司は布団から起き上がると携帯で吉沢に電話した。しかし、本人は今電話に出られませんというアナウンスが虚しく流れるだけで、吉沢とは連絡が取れなかった。急いでメールを送り吉沢のメールを待つことにした。しかしいくら待っても何の返事もこなかった。

そのときアパートの玄関扉をコンコンとノックする音がした。吉沢が一度もこのアパートに来ていないにも拘らず、もしや彼女でないかと思い信司は急いでドアを開けた。

そこには今まで見たこともない、水色のワンピースを着た美しい女性が立っていた。この女性はいったい何者なのだろう。どこかで会ったような、初めてではないような、しかしいくら考えても思い出せなかった。

「あの私森脇といいます」

「貴方は・・・・・・」

目の前にいる女性は息を呑むほど美しかった。芸能人を間近で見たことはなかったが、目の前にいる女性は、テレビに出ても決して引けを取らない容姿を持ち合わせている。信司が女性に見とれていると、森脇と名乗るその女性も信じの目を直視した。「明日香のことで貴方にどうしてもお話ししたいことがありまして、失礼ながら今日こうして伺いました」

女性は明日香と知り合いなのだろうか。透き通るような優しい女性の声は、どこかで聞いた記憶がある。

「明日香の知り合いなんですか？」

この女性とはどこかで会った記憶があるのだが、どうしても思い出せない。男の部屋にわざわざ来たということはよほど大事な話なのだろう。

古い木造アパートと完成された容姿を持つその女性は、あまりにも不釣合いだった。信司は一瞬考えた。むさくるしい狭い部屋に入ってもらおうか、それとも近くの喫茶店で待ってもらおうか。しかしこのまま目を離したらこの女性は、二度と自分の前に現れないのではないかと考え、汚いがここに入ってもらおうと決心した。

「汚いところですけど、どうぞ上がって下さい」

「よろしいですか？」

人が二人も立てば、いっぱいになってしまうほどの広さしかない、コンクリートの三和土に、女性は何の迷いもなく入ってきた。三和土には普段信司が履いているスニーカーが二足脱ぎ散らかしてあった。信司はあわててスニーカーを揃えた。しかしその行動とは裏腹に、さほど恥ずかしいという気持ちは湧いてこなかった。女性は白いハイヒールを脱ぐと青い絨毯に足を乗せた。そして自分の居場所を目で探していた。狭い部屋にはパイプベットと、小さなガラステーブルと、カラーボックスが何個かあるだけの殺風景な部屋だった。

「むさくるしいところですけど、そこに座ってください」

信司はベッドの上にあるクッションを女性の足元に置いた。しかし女性はそれをどかし、絨毯の上に直接正座した。この部屋には座布団すらない。仕方なく信司もガラステーブルを挟んで女性の向かいに座った。ベッドの布団は寝起きのままくしゃくしゃだった。

「明日香はよくこの部屋に来たんですか？」

「はい」

　女性は正座をしたまま部屋の中を見回した。いったいこの女性は何者なんだろう。何の目的があって自分のところに来たのだろうか。
「信司さんまだ私が誰だか分かりませんか？」
　そのとき急にこの目の前の女性が誰か思い出した。
「貴女は占いの館の占い師・・・・・・」
　吉沢が明日香殺害の犯人と決め付けた女性だった。信司自身も先ほどまで目の前の女性が、明日香を殺した犯人だと何の疑いも持っていなかった。でもなぜ自分のところにわざわざこの女性は訪ねてきたのか。目の前の女性があの占いの館の女性なら、おそらく明日香は信司のことをこの女性にリークしていたに違いない。何もかもこの女性が知っていたのだろうが、今まで明日香を殺害したと思い込んでいた女性が、自ら信司の下に赴いたことに、どう対処したらいいか分からなかった。
「もう貴方も気づいたかもしれませんが、明日香と私は愛し合っていました。正確にいうと明日香は違っていたかもしれません。私たちはお互い名古屋の高校で知り合ったのです。私たちの通っていたのは女子高だったため、殆どの生徒があまり男性と御付き合いするチャンスがありませんでした。私は以前から女の人しか愛せなかったものですから、明日香が同性愛者かどうか考えず、一方的に自分のほうに引き寄せてしまったのです。そのときは明日香も男性経験がなかったため、私のなすがままになっていました。明日香が何も抵抗しないので、てっきり彼女も私と同じなのだと思い込んでしまったのです」
　吉沢が推測したことは、彼女が殺害犯であるということ以外は略当たっていた。それでも見ず知らずの男に家に来て、自分の恥部を打ち明けることが、どうしても理解できなかった。
「明日香と貴女はレズだったのですか？」
　その言葉に女性は一瞬目を大きく見開き信司を凝視した。自分がいった言葉が、同性愛者に対しての差別用語だったのかは分からないものの、自ら告白しておいて不満を顔に表すのは御門違いではないだろうか。
「お察しの通り明日香は本当の同性愛者ではなかったのです。貴方を好きになったということは、少なくとも女性でなければ受け入れられない私とは違っていました」
「僕は同性愛者じゃないけど男が男を好きになっても、女が女を好きになっても別に悪いことだとは思いません。本人同士が愛し合っていれば、それは他人がとやかくいう筋合いのものじゃないと思うんです」
　女性の顔が先ほどと違い穏やかになった。
「ありがとう。やはり貴方は明日香が惚れただけあって、自分の信念を持った素晴らしい方だわ。明日香に私には好きな彼がいると告白されたとき、すごくショックだったけど明日香を心から愛していたから、潔く身を引こうと思い、一度だけ貴方に会わせてと明日香に頼んでみたのです」
　こんな綺麗な人がレズだなんて、何かとてももったいないような気がした。ふっと洋子という女性の裸を想像する自分は不謹慎なのだろうか。同性でも魅力あるこの女性に魅入られてしまうのも仕方ないような気もする。自分はいくら男性が格好良くても、それらを好きになったりはしないが、女性には同性を好きになる要素は、男性よりも強いのかもしれないと思った。

「それがあの占いの館に僕を連れて行った理由だったんですか。だから貴女は僕たちの関係が破局しますとふざけたんですね」
「確かに貴方のことは予め明日香に訊いていたのは事実です。しかし貴方たちが破局していくのが見えたのは間違いないのです。私にはその人の未来が分かるのです」
　目の前の綺麗な容姿を持つ女性の口から発せられた言葉は、あまりにも現実離れした内容だった。そんなことが本当に可能なのだろうか。
「これは貴方にいくら説明しても、信じてもらえないかもしれません。しかし私は嘘をついているわけでも何でもないのです」
　そのようなことをいわれても、とても非科学的に思えて信じることはできなかった。以前の信司であれば絶対に否定的だったが、明日香が亡くなってからというもの、自分がいくら否定しても世の中には科学で解明できないことも間々あるということを、受け入れざるをえないことも事実に違いなかった。今の自分には受け入れられなくても、目の前の女性がわざわざ信司のところまで出向いて、嘘をいいに来たとは考えられない。それがたとえ科学的に説明できなくとも、そのようなことが世の中にはあっても、おかしくないと思える自分がそこにいた。
「なぜ今日貴女はここに来たのですか？」
「明日香を殺害した少年が逮捕されたでしょう。それは私が警察に通報したからなのです。この子は同じくらいの少年も殺害しているのです」
「え・・・・・・。何ですって！」
「明日香が亡くなる二日ほど前、私は兄の結婚式のため名古屋に帰省していました。そのとき乗った新幹線の中で見たんです。明日香が少年に殺される姿が、新幹線の窓ガラスに映ったんです。それで私はあわてて明日香に電話を入れ、貴女に悪い相が出ているから気をつけてと注意したのですけど、さすがに本人が殺されるかも知れないとはいえませんでした。私はそのとき車窓をぼーと眺めていました、新幹線はトンネルに入り真っ黒なガラスに、自分の姿が映りその奥に明日香が、顔の綺麗な少年に首を絞められている姿が映ったのです」
「そのような映像はテレビのように鮮明に映るのですか？」
　あまりにも現実離れしているようで、とても信じられる内容ではなかった。
「正確にいうと映像はテレビのように鮮明に見えるわけでなく、ホログラフィーみたいに見えるのです。その後にその少年が同じ年齢の少年をナイフで刺している姿も見えました」
　この女性のいっていることが事実ならば、なぜ明日香が殺される前に、それを食い止めることができなかったのか。
「なぜそれが分かっていたのなら、明日香に別の場所へ行ってもらうなり、それを回避する努力をしなかったのですか？」
　信司は疑問を素直にぶつけた。
「貴方の仰りたいことも、そのように疑問に感じることも分かります。しかし運命というものは他力で簡単に変えられるものではないのです」
　信司は中学の頃占いや予言がいかに現実的でないか、自分の頭の中で考えたことがある。たとえばＡという人間が占い師に占ってもらい、占い師から貴方は一週間以内に事故に遭うでしょう

。といわれたとする。その事故が交通事故か何か分からないものの、それを回避するためＡは食料品を買い込み十日間家の中に籠る。そうなれば震災でもない限りＡは事故に遭うことはないだろう。空から隕石や飛行機が落ちてくる可能性は限りなくゼロに近い。Ａが何もなく無事でいればＡの人生が変るわけもなく、逆にＡの周りにいる人の人生が変わってくる。交通事故として考えれば、Ａを事故に巻き込んだＢという人が存在するはずである。そのＢという人の人生も変わってくるし、救急隊員や病院、果ては保険会社の人や、その保険に加入している人の人生まで変わってくる。現実にはそのような占いは行われないであろうが、そのときは占いによって、人の人生が簡単に決まるものではないと納得したかった。

「貴女が見たという明日香の最悪の状態を、占いで回避することはできなかったのですか？それだったら何のための占いなのですか？」

　今でも信司は占いをまったく信じていないが、人がそのような最悪の状況を予測することができたのなら、そのような状態にならないように、回避する方法があってもおかしくないのではと思えてならなかった。

「貴方のいうとおり占いでは、人を救うことはできないかもしれません。しかし私もまさか本当にこんなに早く明日香が、私が見た現象どおりになるとは思わなかったのです。何を隠そう一番驚いているのは私なのですから。私もただ手をこまねいていたわけではありません。中学生ぐらいの男子ということで、明日香の周りにそのような少年がいないか彼女に訊ねました。そしたらつい先日まで家庭教師として、中学二年生の少年を教えていたというのです。私はすかさずその子には気をつけるようにと忠告しました。明日香もまさかその子に殺されるとは思っていなかったようで、私がなぜこんなに心配しているのか分からなかったようです。私も兄の結婚式が済んだら東京に戻り、何とか明日香の身を案じ、それを回避しようと考えていた矢先です。おそらく私が新幹線の中で見たあの日から、明日香が殺害される日まで、二日もなかったのではないでしょうか。私は名古屋に帰り兄の結婚式が行われる沖縄に、両親と三人で向かいました。沖縄からも何度か明日香に電話をしました。しかし一向に繋がりませんでした。そのとき私は明日香が殺されたことを確信したのです。明日香の殺害をニュースで知ったとき、すぐに匿名で警察に通報しました。しかし私の通報に警察は耳を貸しませんでした。どこの誰かも分からない者のいうことを、まともに聞けないというのも致し方ないことかもしれません」

　そこまで話すと女性は信司の顔を覗き込むように見た。

「それなのに何で少年は逮捕されたのですか？」

「その後も私はしつこく警察に訴えたのですが、やはり取り合ってもらえませんでした。それで新たに新情報として、少年に同じくらいの少年が、ナイフのようなもので刺されると告げました。少年が逮捕されたということは、同じ歳の少年も殺害されているはずです。貴方には信じられないことでしょうが、警察のほうもかなり驚いていることと推察されます。おそらく警察は私を血眼になって捜しているのではないでしょうか。警察にしてみれば、共犯者でなければ知りえないことを私が知っているわけです。最悪の場合私は警察に拘束されるかもしれません。そのとき警察に何も証言しなくてもかまわないので、私を信じて見守っていて欲しいのです」

「それはどういうことですか？」

「私が拘束される可能性は少ないと思いますが、もし私が共犯として拘束されれば、少年と違っ

て私の名前は公の下に晒されることになるでしょう。そのとき貴方だけには信じて欲しいのです」

　現実問題としてこの女性の予知能力が本当なのか、今の時点ではまったく分からない。寧ろ本人がいうように共犯として考えたほうが辻褄が合う。でも今の自分はこの女性がとても嘘をついているとは思えなかった。

「貴女が万が一警察に捕まっても、僕は貴女のことを警察に何も証言しなくてもいいといいましたが、それならなぜ今日わざわざ僕のところに来たのですか？それから貴女自身のことは、占いで予測することはできないのですか？」

「私の未来は私自身では見ることはできません。私はただ一人でいいから私を信じてくれる人が欲しかったのです。最悪の場合世の中すべての人が、私が事件に関与していると疑っても、一人だけでもいいから、私の気持ちを理解してくれる人が欲しかったのです」

「今日初めて会った僕を信用してもいいんですか。それってあまりにも無謀な考えじゃないでしょうか」

　この女性が何ゆえに信司のところまで、わざわざ出向いて来たのか分からなかったものの、それはおそらく明日香が信司のことを、本当に心から信じることのできる数少ない人物に違いないと語ったのかもしれない。明日香が亡くなってしまったため真相は定かでないが、少なくともこの女性に対しては、自分のことを悪くはいっていなかったのではないだろうか。それはそれで嬉しいことに違いなかった。

「貴方がどう思おうと、私自身が納得できればそれでいいのです」

　そのときの信司はすでに、この女性が殺人犯でないと確信していた。それは何の裏付けもないにも拘らず、自分の中にある何かが、この女性は明日香を殺していないと、呼びかけているように感じたからに他ならない。

二十五

僕は明日香とさよならした後、どうやって家に帰り着いたのか、まったく記憶がなかった。気がついたら自分の部屋のベッドで横になっていた。

人の邪悪な精神はいったいどこから来るのだろうか。一夜明けると僕はまったく別人になっていた。なぜ僕はそのように考えたのだろう。今思い返してもどうしても分からない。僕の生徒手帳を笑いながら便所に投げ捨てた矢口智也。あいつの顔が急に浮かんだ。いや正確にいうと急に浮かんだのではない。いつも僕の頭の片隅にあいつの顔が、便器にこびりついたうんこのように存在していた。あいつは虫けらだ。しかし今の僕はあいつよりもっと虫けらになってしまった。

同級生だった智也の住んでいるマンションは、優輝の住んでいるマンションより、やや駅から離れた場所に位置していた。智也は月・水・金と夜学習塾に通っている。家に帰宅するのはいつも十時を優に回っていた。塾に通うのにマンション横の、白地公園を抜けるルートをいつもとっていた。白地公園は南北に長く延びた公園で、智也のマンションから塾に行くには、この公園を横切って行くのが一番の近道だった。昼間は子供や家族連れが遊んで結構賑わっているが、夜になると人通りがなく闇だけが広がる寂しい公園になる。

僕が虫けらになったのはあいつのせいだ。あいつに髪の毛を摑まれ、便器に押し付けられたとき僕の心は壊れた。そのとき復讐を誓ったのだ。あんなことを笑いながらする奴に、人間として生きる資格があるはずがない。あいつも、あいつの親も、あいつがこの世に生を受けたことを後悔させてやる。幸いにして今なら僕は、人を殺しても罪に問われることはないだろう。十四歳にならないと罪にならないとテレビで誰かが喋っていた。

優輝は何日も掛けて智也を尾行し、行動パターンを観察した。智也は自転車で塾に通っていたが、白地公園を通り抜けるとき、出入り口に鎖が張ってあるため自転車を降りる。やるならそのときだ。もう僕はすでに人を殺している。人を殺すのに何の迷いも躊躇いもなかった。前回はこの世の中で一番好きな人を殺したが、今度はこの世の中で一番嫌いな奴を殺す。前回は成り行きで殺してしまったが、今回は最初から殺すつもりでいる。あいつが自分の最後を悟ったとき、どんな顔をするか楽しみだった。

その日優輝は通販で手に入れたナイフをポケットに忍ばせ、九時頃から学習塾前の建物の陰に潜んでいた。三十分もすると塾前の道は、子供たちを迎えに来た車で一杯になる。女の子は殆ど親が車で迎えに来てくれるようだが、男の子は自転車や歩いて通っている者もいた。智也も自転車で通っていた。

白地公園は夜間オートバイなどの車両が入らないように、すべての出入り口に鎖が張ってある。智也はいつも鎖の張ってある前で自転車を降り、鎖を跨いで自転車を公園の中にいれ、反対側の出入り口まで漕いでそこでまた自転車を降り、鎖を跨いで家に帰るという行動を繰り返していた。

塾から出てきた智也を確認すると、優輝は自転車に跨り無灯火のまま智也の後を追った。この時点で智也は十センチほど優輝より身長が低かった。目的の場所まで来ると智也は自転車を降り、自転車を担ぐと鎖の向こう側に置いた。鎖の揺れる音と自転車のチエンの弛む音が闇夜に僅か

に響いたと同時に、優輝は自転車を投げ出し、一目散で智也に体当たりした。自転車のハンドルとサドルを持ったまま、智也は前のめりに倒れていった。智也の脇腹にはナイフがしっかりとめり込んでいた。優輝はポケットからライトを取り出すと、それを智也に照らした。こちらを振り向いた智也の顔は恐怖に戦いていた。

「智也、僕が誰だか分かるかい？」

「いたいよ～。いたいよ～。救急車呼んで・・・・・・」

　うつ伏せになった智也は、小きざみに身体を震わせていた。

「智也、救急車を呼んでも無駄だよ。だって君は間もなく死ぬのだから」

　優輝は智也の背中よりの脇腹に刺さったナイフを抜くと、智也をうつ伏せの状態から仰向けにした。ライトで照らされた智也は脇腹を片手で押さえ、暗闇に立っている優輝を仰ぎ見た。

「いたいよ～」

　恐怖に戦いたように見えたのはほんの一瞬で、後は苦痛に顔を歪めていた。

「すぐ痛みはなくなるよ。君はもうすぐ死ぬんだ」

　冷たく言い放つと優輝は自分の顔をライトで照らした。

「僕が誰だか分かるかい。君がいじめた白鳥優輝だよ。一年前君に便所に顔を突っ込まれたから、今日わざわざこうやって復讐しに来たのさ」

「たすけて～」

　その叫び声は闇夜に大きく響いた。優輝自身予想もしなかった大きな叫び声にビックリした。咄嗟に持っていたナイフを智也の喉に刺した。智也はゴボゴボと湿った咳を繰り返すと静かに目を閉じた。思っていたよりあまりにも簡単に死んでしまって、正直つまらなかった。もっと命乞いをすることを想像していた優輝には期待はずれだった。

　優輝は智也から離れると急いで自転車に戻り、それに跨ると自転車を漕ぎ家に向かった。途中無灯火に気がつきライトのスイッチを入れたがライトは点かなかった。先ほど自転車を投げ出したとき、ライトが壊れてしまったのだろう。マンションに着き駐輪場に自転車を停めると、外階段を使って自分の部屋に戻った。玄関を開けると真っ先に洗面所へ行って血のついたジャンパーを脱ぎ水で洗い流した。ジャンパーは黒色の合成皮革だったため、簡単に血を落とすことができた。ジーパンも黒だったため返り血は目立たなかった。優輝は服をすべて脱ぎシャワーを浴びた。顔についた血も石鹸を使い綺麗に洗い流した。人を殺すのは楽しいし簡単だ。今度は戸浦浩を殺そう。あいつも智也と一緒になって僕をいじめた張本人だ。

　今度は智也のような面倒な方法は取らなかった。浩の家に直接出向いて行くことにした。浩の家は一戸建ての家で、優輝の住んでいるマンションからは、少し離れた場所に位置していた。浩の家まで自転車で行くと、門扉にあるインターホンを押した。

「どちらさまですか？」

　浩の母親らしき者の声が聞こえた。

「あの、僕浩君の同級生の前中です」と嘘を吐いた。浩と前中進と智也はよくつるんで遊んでいた。僕をいじめた一人でもある。暫らくすると玄関扉が開き、浩は門の前まで歩いてきた。優輝は慌てて近くあった電柱の影に自転車を置いたまま隠れた。浩が門扉を開け左右と自分を訪ね

てきた友達を探す仕草をすると、目の前に停まっている自転車に目を留めた。
　優輝はポケットに忍ばせたナイフを手に取ると、浩のところまで走って行った。浩がこちらに目を向けた瞬間、優輝は浩の鳩尾目掛け体当りした。浩はそのまま尻餅をつくように後ろに倒れた。浩の身体の中心には、優輝のナイフがしっかりとめり込んでいた。浩は今自分に起きた不幸な出来事に、どう対処したらいいか分からない不安な顔を優輝に向けた。
「さよなら。浩、地獄で会おうぜ」
「おまえ・・・・・・」
　浩の身体からナイフを抜くと、一目散で自転車に飛び乗り家に向かった。
　リビングでＰＳ２をやっていると、インターホンの呼び鈴が鳴った。無視してテレビゲームを続けていると、再度インターホンが鳴った。それでも無視し続けると、今度は玄関扉を叩きだした。
「白鳥さん、おられますか？」
　玄関前で男が怒鳴っている。
「優輝君。いるんでしょ」
　何で僕の名前を知っているのか。嫌な奴だ。あまりのしつこさにどんな奴かと思い、インターホンのモニターを映し出すスイッチを入れると、そこには警察官の制服を着た男が二人立っていた。優輝は仕方なく玄関に行き扉を開けた。
「優輝君だね。お母さんはいないの？」
「いません」
「ちょっとお巡りさんと警察署に来てもらえないかな」
「どうしてですか？」
「ちょっと訊きたいことがあるんだ」
「お巡りさん。知らないんですか。僕は十三歳だから逮捕できませんよ」
「え・・・・・・」
　目の前にいる警察官は、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしていた。

二十六

女性占い師、洋子が帰った後狐にでもつままれた思いだった。普通に考えればあの占い師は大嘘吐きか、頭がいかれているとしか考えられない。考えれば考えるほど自分の意に反し、洋子のいったことに何の疑いを持っていない自分に気がついた。

その日の夜吉沢から電話を貰い、彼女の家の近くにあるファミレスで会うことにした。吉沢はテレビの報道を目にしていたし、信司も先ほど洋子が自分のところに訪ねてきたことを告げると吉沢はかなり驚いていた。吉沢は吉沢なりの考えがあって洋子が犯人でないかと推測したに違いない。殺害犯という肝心なところは当たっていなかったものの、彼女たちがレズだったということは、吉沢の推測したとおりだった。それでも少年が逮捕されたことは事実に違いないが、洋子が犯人でないという確証は今はない。信司自身はすでに洋子が犯人でないような気がしていたが、それとてどこまで彼女が真実を述べているか疑問だった。いや自分は絶対洋子が明日香を殺した犯人でないと信じている。今日初めて会ったというのになぜか、洋子に対して疑いのない感情を抱いていた。もし仮に洋子が犯人なら、本当に自分は愚かなお人よしに違いない。それでもかまわないと思える自分が不思議ですらあった。

吉沢に会う前夕方のニュースでは、中学生二人を殺害した少年が、明日香の殺害も認めたと報道されていた。信司は新聞も取っていなければ、ニュース番組やワイドショーも殆ど見なかったため、中学生二人が殺されているという報道をまったく知らなかった。

今日最初に明日香の殺害が少年の反抗だったという報道を耳にしたが、順番からいうと少年の殺害報道が最初だった。洋子がいったとおりになった。これはあくまで洋子が事件に関与していないことを前提にしてである。洋子が事件に関与しているのであれば、そのことを知っていても何の不思議もない。

少年が警察に逮捕されたのが、洋子の通報によるものなのか、報道では一切触れなかった。この時点の警察発表では、通報者の存在を明らかにしていなかったようだ。

少年は十四歳に達していなかったため、本来であれば少年院送致になることはないものの、新たなる少年法の見直しもあり、少年院送致もあるかもしれないとレポーターは述べていた。

驚いたことにこの少年は、自分が十四歳に達していないため、刑事責任は問われないということを熟知していた。少年保護の立場から、あまり派手な近隣への訊きこみは行われなかったものの、あの子がまさかという意見が大半を占めていた。そしてその少年はとても美しい容姿をしているということだった。

吉沢に会うのはほんの数日振りだったにも拘らず、だいぶ以前に会ったような錯覚を覚えた。いつものファミレスに行くと、すでに吉沢は先に来てコーヒーをまずそうに飲んでいた。その姿はひどく疲れているような感じを受けた。信司は吉沢の向かいに座るとホットコーヒーを注文した。旅行に誘ってもらったあの日すごく身近に感じた吉沢が、今はとても遠くに感じることが不思議でならない。

「可世木君洋子という女性に会ったの？」

吉沢のほうから口火を切った。

「はい。あの人が僕のアパートに直接訪ねてきたのです。この世のものとも思えぬ綺麗な人でした」
　テーブルを挟んでお互いの目を見ながら話していたが、吉沢は嫌悪を露にした。曲りなりにも自分を好いてくれている女性に対して、つい先ほどまで自分の彼女を殺したかもしれないと思っていた女性を、褒める言葉を発したことに、軽率だったと思いつつそれをいわずにはいられなかった。
「まるで雪女にでも会ったというような表情ね」
　吉沢はからかうつもりだったのか、嫌味っぽく信司の耳には届いた。
「雪女みたいに肌の色が真っ白な人でした。世の中にはあんな綺麗な人がいるんですね」
「可世木君まさかその人に惚れたの？」
　信司にしてみれば綺麗な花や、美しい景色を見て、それに感動したことを伝えようとしただけだが、吉沢はそうとは受け取らなかった。
「吉沢先輩。あの洋子という女性は、とても信じられないことを口にしたんです。それを聞いたとき以前の僕なら絶対に信じることができなかったのですが、今の僕はそれを素直に受け入られるのです」
　信司は洋子から訊かされたことをすべて吉沢に報告した。吉沢はそれに対して否定的な意見を述べると思っていたが、意外にも吉沢の口から出た言葉は違っていた。
「少年が実際に逮捕されたけど、冷静に考えても洋子という女性が、少年と一緒になって明日香を殺害したとは考えられないわ。ただ私自身は人の未来を一瞬でも垣間見るということは認めたくない。しかし世の中には説明のつかない不思議なことが沢山あるのも事実でしょ。私自身最初貴方と一緒にあの占いの館に行ったとき、なぜか分からないが洋子と明日香は、同性愛者だと頭の中に呼びかけられたような気がしたの。それまで彼女たちが同性愛者だなんてまったく考えもしなかったのに。今から考えれば洋子という女性が私にテレパシーを送ったのかもしれないわね。信じたくはないけれど。自分が現認していないからすべて否定するというのも考えてみれば変な話よね。たとえばの話だけど、百年前の人類に半世紀もしたら人類は月に行くことができるなんていっても誰が信じると思う。それどころかそんなことをいう人は、頭でもいかれたんじゃないかといわれるのがおちでしょう。時間のワームホールじゃないけど、その女性には時間が歪んだとき、一瞬未来が見えたと考えてもおかしくないでしょう。たとえば信司君、自分の後頭部を見たいと思ったらどうする？」
「鏡を二枚合わせて後頭部を見ます」
　一瞬吉沢が何をいいたいのか少し理解できたような気がした。
「それが見えない部分を見る鏡が、洋子にとって水晶玉だったのですね」
「私はそこまで断定したわけではないけれど、鏡と鏡を合わせると、永遠と二次元の世界が続いているでしょう。だからといって普通の人には目に入るものしか見えないのだけれども、ある特定の人には、その先が見えると聞いたことがあるの。テレビなんか何で映るか不思議に思ったことない？」
　そういわれても難しい数学の問題を解かされているようで、信司には理解できなかった。ただ

吉沢のいいたいことは何となく分かったような気がする。今まで吉沢にしても、信司にしても、科学では解明できないものは、すべて否定しようとしてきた。しかし洋子の出現によって、世の中には科学だけでは解明できないこともあるということを、理解しようとする気持ちが芽生えたのも事実だった。
「吉沢先輩、洋子のいっていることを信じるんですか？」
「いや信じてはいないというよりも、信じたくないというのが正直なところね。それでも洋子という女性が、わざわざ貴方のところへ尋ねてきたということは、何かしらの重要な決意があってのことだと思うわよ。可世木君貴方も随分見込まれたものね」
「吉沢先輩からかわないでください」
「からかってなんかいないわ。その洋子という女性は、何らかの特殊な能力があると仮定して、自分の窮地を悟ったのかもしれないわね。そして貴方なら信じられると思い相談したんだと思うの。それにたった一人でも信じてもらえればいいなんて、キリスト教的な考えにも思えるわね」
「そんな。彼女は自分が、警察に拘束されることはまずないといっていましたよ」
「本当にそうかしら。洋子はおそらく近日中に何らかの事情で、警察に拘束されるんじゃないかと感じ、貴方のところに来たんだと思うの。洋子が特殊な能力を持っているのなら、彼女を救える鍵を握っているのは、可世木君貴方しかいないのよ」
「まさか、洋子は僕が警察に対して、何も証言しなくてもいいとさえいったんですよ」
　一瞬もし洋子という占い師が何らかの形で、警察に逮捕されるなり拘束されたのなら、信司の性格からして知らぬ存ぜぬでは通せないだろう。洋子が事件に関わっていないと警察に訴えるに違いない。自分の性格からしてきっとそうするはずだ。そう思ったとき、そこまで見越して洋子は自分に信じて欲しいといったのか。明日香はいったいどのように洋子に自分のことを語ったのか。今では確かめることさえできなくなってしまったが、突然自分では理解できない迷路に放り込まれてしまったような錯覚に陥った。
「可世木君の性格からして、知らぬ顔のはんべいではいられないはずよ」
　まさしく吉沢のいうことは図星だった。毒を食らわば皿までの例えじゃないが、こうなったら行くところまで行くしかないと、開き直れる自分が不思議に思えた。
「吉沢先輩この一件が一段落したら、僕の実家に行きましょう」
「ぜひ連れてって」
　吉沢は今までにない明るい声で答えた。
　この数日後吉沢のいったとおりになった。洋子は重要参考人として警察に勾留された。

二十七

マスコミの取り上げ方は凄まじいものだった。『現代の魔女狩り』あるいは『カリスマ占い師仮面剥がれる』などの洋子を嘲笑する報道が矢継ぎ早に流れた。マスコミの報道にも二種類あり、擁護するものと蹴落すものと意見が真っ二つに分かれた。カリスマ占い師として何度かマスコミにも取り上げられたことはあったが、公の場で素顔を晒されたのは洋子にとって初めての経験だったのだろう。雑誌などの取材のときは、いつもベールで顔を隠し目だけを露出させた格好をしていたため、今回の報道で顔を晒されたことは、彼女にとって大変辛いものだったに違いない。

無責任な報道を目にするうち信司は居た堪れなくなり、洋子が勾留されている警察署に足を運んだ。単に警察官へ洋子の無実を訴えたところで、まったく取り合ってもらえなかった。洋子が殺人事件に関わってないという証拠が出ない限り、洋子は釈放されないと告げられた。もし仮に洋子が少年の共犯としても、明日香が殺害された時間洋子は、名古屋か沖縄にいた。それはおそらく警察のほうでも裏を取っているはずである。実行犯は少年だが、洋子は後ろで糸を引いていると疑っているのではないか。洋子が警察に勾留されたのは通報者だったというよりも、最初から明日香の親しい友人ということで、容疑者扱いになっていたようだ。それがどのような経緯で、洋子が通報者だったことに辿り着いたのか分からなかったが、おそらく吉沢が推測したように、一番身近にいる疑わしい人物が洋子だったのではないか。

洋子は警察の取調べに於いて、少年とはまったく面識がなく、ただ占いで自分の親友を殺害した人物が、少年と出たためそのように述べたようだが、少年は明日香と洋子と三人で何度か会ったことがあり、それで教唆して明日香を殺害したと供述している。しかしこのような少年の供述は、ワイドショーなどの各専門分野のコメンテーターたちも、一様に信憑性がないと疑問を投げかけた。マスコミの報道も洋子は、事件とは無関係ではないかという方向に傾きかけていた。

しかしあれほど洋子の周りを穿り返していたにも拘らず、明日香との本当の関係は公になることはなかった。おそらく洋子はそれだけは何があっても世間に知られたくなかったに違いない。信司はふと自分の口からそのことが漏れる可能性があったにも拘らず、洋子が信司にすべてを託したということは、改めて自分を心から信じていたのだと思い至った。

洋子にしてみれば、自分自身が危険な目に会うにも拘らずリスクを冒し、身も知らない少年が実行犯だと警察に通報したことは、当然明日香に早く成仏してほしいという気持ちもあったからだろう。それは即ち明日香に対する愛情が、それほど強かったからに他ならない。警察でも色々な矛盾が見つかったのか勾留期間の更新をしなかった。つまり警察は洋子が殺人事件に関与しているという確証を、何一つ見つけ出すことができなかったのだ。

信司が何度も警察に足を運んだことは、洋子は知らないかもしれない。それでも洋子にとって信司は、やはり心から信じることのできる、唯一の人物だったのは間違いないだろう。

世間でも洋子に対し同情的な意見も集まり、芸能プロダクションなどは、洋子をタレントへスカウトした。しかし洋子はそれらを断り以前の平凡な占い師に戻っていった。信司はもう一度洋子に会いたいと思ったが、あれ以来洋子とは会っていない。

事件は本当に解決したのだろうか。信司は明日香が住んでいた町を見下ろせる高台に、オートバイを走らせた。夕日が丁度ビルの陰に落ちていくところで、辺り一面オレンジ色に輝いていた。信司がガードレール前にオートバイを停めると、ガードレールを跨いで崖の淵に立った。ところどころ錆が浮き出たガードレールに触ると、白いベビーパウダーのような粉が手に薄っすらと付着した。もう塗装が劣化しているのだろう。

明日香の住んでいたマンションは、目で探してもなかなか見つけられなかった。明日香との一年はいったい何だったのだろう。そのように考えた途端涙が頬を伝わりアスファルトに落ちた。

「明日香さよなら・・・・・・」

事件が終わっても、手品師の種明かしを知ったときのような感激は少しも湧いてこなかった。それでもこの辛い想い出さえ、すべては時間が解決してくれるに違いない。そう思うことで自分自身納得したかった。

信司にとって明日香が殺害されたことは確かに衝撃だったが、それ以上に洋子の存在が衝撃的だった。信司は今でも本当に、洋子が事件に関与していないのではないかと、確証を持てない自分がいることに改めて気がついた。

それはまるでエッシャーの絵の中に迷い込んでしまったような感覚だった。

（了）